



日曜日の出来事

ひなゆめファンの止まり木合同本

編集 明日の明後日

目次（著者名は敬称略）

- 1 ひみつの咲夜ちゃん 双剣士(p.2)
- 2 意外な遊び方 瑞穂(p.7)
- 3 クリスちゃんⅡ滅入る ピーすけ(p.17)
- 4 休日に関する小話 雪月(p.25)
- 5 蟻の一穴 きは(p.31)
- 6 オレンジのシンдрローム ピーすけ(p.35)
- 7 パラレルサンデー ひよっくー(p.38)
- 8 鎮守府の日常 文章・霞煌(p.54)
イラスト・充電池

あとがき

編集後記

表紙イラスト ピーすけ

本書は Web サイト「ひなゆめファンの止まり木」内の企画『2016年 夏の有志合同本』において、日曜日の出来事をテーマとして2016年7月3日～同年8月21日の間に寄せられた作品をまとめたものとなります。

公開サイト：ひなゆめファンの止まり木

<http://soukenshi.net/perch/>

企画趣旨説明・作品募集フォーム：

<http://soukenshi.net/perch/sp/sunday2016/patio.cg>

1

ひみつの咲夜ちゃん

著者…双剣士

皆様こんにちは。残暑厳しい折、いかがお過ごしでしょうか。鷺ノ宮伊澄です。

今日は日曜日の出来事ということで、連載本編ではほとんど語られることのない咲夜の休日についてリサーチしていきたいと思えます。

日頃からナギやワタル君の世話ばかり焼いていて、お誕生日パーティー以外では本人のプライベートを明かす機会のなかった咲夜。漫才好きとか女子校でモテモテという設定が活かされることもなく、愛歌さんのご実家が大恩を受けたという伏線も放置されたまま、天王州理事長の執事を引き取る際に聞いたはずの情報も未だ闇の中です。

水くさいとは思いませんか？ 幼なじみの私たちにも隠し通すだなんて。少しばかり年上だからと言って他人の面倒ばかり見ている感のある咲夜ですが、私たちだっていつまでも小さな子供ではないのです。ここは親友の私が、頼り甲斐のあるところを見せてあげようではありませんか！！

……さて、ここはいったいどこでしょう？

普段とは違う咲夜の一面を見つけるために、アポを取らずに咲夜

のお屋敷に向かったところまでは良かったのですが……あの子の家って砂漠の真ん中にありましたっけ？

道を間違えたはずはないのです、ハイブリッドでクレバーな私はiPadを片手に、次世代技術の賜物・Siriちゃんの言うとおりに歩いてきたのですから。そりゃあたまには、ちょうちよを追いかけたりシマウマさんと遊んだりもしましたけど……そのたびに『咲夜のおうちはどこ？』ってSiriちゃんに聞きながら方向を決めてきたのですもの。多少遠回りにはなっても、咲夜の家には近づいているはずですよ。

大丈夫大丈夫、私はしっかりしているんですもの。

……しばらく歩いて、ようやく見覚えのある光景が見えてきました。た。

ここは確かそう、ラスベガス。ワタル君と一緒にきた咲夜がバニー姿で半裸にされたという思い出の場所でしたね。たしか修学旅行で私たちが来たときにも咲夜は変な格好で遊びに来て、特に何かをするでもなく帰って行ったような記憶がありますけど……もしかしたなくても暇人なのかしら、あの子？

ともかくここまできれれば大丈夫。私は慣れた口振りで、Siriちゃんに問いかけてみます。

「咲夜のおうちは、どっち？」

「海岸沿いに八千キロ、北上してください」

こうして気づけばアラスカへ。咲夜つたらずいぶん酔狂なところにいるのね。まあいいわ、できる女はこれ位じゃ諦めないものよ。さあ、またSiriちゃんと話を……。

「いいかげんにせんかい!!」

「あら咲夜、やっと会えたわね。いったい今までどこに行っていたの?」

「それはこっちの台詞やちゅーの!! 伊澄さんがくるちゅーから待ったのに何日待っても来えへんで、iPadの電波たどつてみたら海の向こうでびよんびよん転移を繰り返して!!」

咲夜つたら、何を怒っているのかしら。現に道順は間違つてなかったでしょ、こうして咲夜と会えたんだし。

「こっちが必死になって追いかけてきたんやちゅーの!! まったく、世界規模でボケ倒しよってからに……」

「まあ……私を追いかけて来ただなんて、咲夜ってストーカーさんだったの? もっと建設的なことに目を向けた方がいいわよ」

「ア・ン・タ・タ・言うなあああああ!!」

頭から湯気を上げながら私のほつぺたをつねる咲夜とは対照的に、私の脳裏は澄み渡っていたのですが……あることに気づいた瞬間、急速冷凍されてしまいました。

「ごめんなさい咲夜、せっかく来てくれて悪いのだけど、今すぐ目の前から消えてくれる?」

「……はあ?」

隠された咲夜の秘密を見つけるといふ目的からすれば、こうして咲夜と直接対面しているわけには行きません。咲夜には私など気にせず普通に話して欲しいのです。そのつもりで言ったのですが……私の言葉を聞いた咲夜の表情の崩れ方は、私の予想を超えていました。

「……そっか、世界を半周してようやく見つけたと思おたら、アンタなんか要らん、か……悪かったな伊澄さん、ウチもお節介が過ぎたようや……」

この世の終わりのような表情をしながら私の手を離して、力なく背中を向ける咲夜。なぜそんな顔をするのか分からないけれど、このままだと彼女が手の届かないどこか遠くに行ってしまう、そんな気がしました。

「待って咲夜! あの……」

「……なんやの?」

「ここから居なくなるのはいいけれど、私の目の届くところには居てね」

「……はあ? 伊澄さん、頭大丈夫なんか……?」

* * *

ここから咲夜とのおしゃべりがしばらく続いて。

私の真の目的を聞いた咲夜はほっとしたようにため息をつくど、遠慮せずになんでも聞いてんか、と大きな胸を張って見せました。隠密調査という当初の狙いとは違う形になってしまったけれど、こゝなつた以上は仕方ありません。普段聞けないようなことも聞いてみることにしましょう。

「それじゃ聞くわよ？ 隠し事なしで答えてね」

「ええよ、なんでも言うてみ」

「咲夜には実は旦那さまがいて、もうすぐ女の子も生まれるって噂を聞いたのだけど、本当？」

「……ぶはっ！！ なな、なんでそんな噂が？ そんなことあるわけないやん、ウチのお腹に子供がおるように見えるか？」

「じゃあ根も葉もない噂に過ぎないのね？ 咲夜の旦那様というのはモテないオタクの妄想で、結婚式に出席したり目撃したという情報も事実に基づかない集団幻覚の一種だと、そう言うのね？」

「そりゃあ……ま、ま、下世話な噂に真正面からツッコむのも野暮やんか、な？ なんか他に聞きたいことはないん？」

苦笑いを浮かべながら話題を変えようとする咲夜。でも困ったことにそれから先も、咲夜の返事は明快さに欠けるものばかりでした。

「メイドターンを教えてくださいました咲夜のメイドさん、実は私たちの身近にいる人だという噂なのだけど、本当？」

「うっ……（本人から強く口止めされとるからなあ）……さ、さあ？

ウチにはよお分かれへんなあ」

「ミコノス島から帰って以来、私の妖怪退治に付き合ってくれなくなったのは何故？」

「……（アンタが天王州理事長さんと一緒に動く以上、マキナ連れたウチが合流したら話が一足飛びに進んでしまうから、とバラす訳にもいかんし）……別に意識してるわけやないけど？ 大人の事情ってやつと違う？」

「一人称がウチだったりワシだったり私になったりするの、なにか使い分けの根拠があるの？」

「……（そんな作者の大昔の凡ミスにまで責任取れるかいっ）……あ、あはは、実はウチにもよう分かれへんねん」

「全裸のままハヤテさまにお姫様抱っこされてキスマでされたという噂があるのだけど、その真偽は？」

「……（アニメ1期BD付属の裏ルートやん！）……の、ノーコメントや」

咲夜はあくまで頑なな態度を崩しません。私は悲しくなってきました。小さいころから一緒に居るのに心の奥底は見せてくれない。私はそんなに信用されていないのでしょうか？ 一線を引かないと

付き合っていない相手だと思われているのでしょうか？

「べ、別に伊澄さんやから隠してる訳やないんやで？ 誰が相手でも、なんとも答えられへん事ってあるんや。それ以外やったら何でも答えたるから」

「じゃあ……私やナギと一緒に居ない休日は、どんな風にして過ごしているの？」

「ええで、それくらいやったら教えたる。そやなあ、そういう時はたいてい、妹や弟たち連れて吉本新喜劇を見に行くか、転校先の友達と一緒にショッピングに行くかやなあ。ショッピング言うても渋谷や原宿は制覇し終えてるから、最近は六本木のほうに足を伸ばして〜」

咲夜は一生懸命に説明してくれるのですが、聞いたことのない単語ばかりで何を言っているか私には分かりません。でも質問した以上は聞かなきゃと思って、せめて相槌だけでも返そうと……。

「……さん、伊澄さん！ 目を覚ましや、眠ったら死んでしまうで！」

「……あ、ああ……」

気がつくとは私は毛布にくるまれて、テントの中の焚き火のそばに寝かされていました。アラスカの吹雪の中で凍死する寸前だったそうです。息を吹き返した私に向かって咲夜は何度も頭を下げてくださいました。

「ごめんな伊澄さん。こういう話に興味も関心も無いのは分かって

たから、今まで話すのを控えてたんや。ナギも自分も、一人っ子で友達のないタイプやし」

「……今まで気を遣ってくれていたのね」

「ああいや、気にせんでええんやで？ こういうのは個性であって、優劣とは違うんやし。それに伊澄さんが自分の知らんところに興味持つてくれて、本当はウチ嬉しいんや。今度は一緒にショッピングいこ、な？」

励ましてくれる咲夜の気持ちは嬉しいのだけど。私は自分が情けなくなってきました。年上ぶってる咲夜の秘密を見つけてやろうと意気込んでおきながら、結局また咲夜のお世話になってる自分が。咲夜のことを何一つ知らずに今日まで来て、聞かされてもさっぱり理解できない自分が。私はしっかり者だったはずなのに。

「ねえ咲夜」

「うん？」

「ごめんね、迷惑ばかりかけて……でもいつか、私も咲夜を助けられるようになるから。今は無理だけど、困ったことがあったらいつでも言ってね」

それは鷺ノ宮伊澄の全面降伏宣言。とても恥ずかしかったけれど、こういうときでないと言えない言葉だと思いました。優しい咲夜は照れたようにほっぺたを掻くと、私の気持ちを軽くするためでしょう、恥ずかしそうに言葉を返してきました。

「うん、それやったら……とりあえず今、困ってることがあるんやけどな」

「なに？ なんでも言ってる」

やっと咲夜の役に立てる。息せき切って身を起こした私を制止しながら、咲夜はポツリとつぶやきました。

「日曜どころか日付変更線まで越えてしもうとるわけやけど、『日曜日の出来事』ちうテーマに対して大丈夫なんやろうか、これ？」

「……咲夜、なんとも答えられない質問って、世の中にはあるのよ」

「ちよ、それウチのセリフのパクリやん！」

お後がよろしいようで。

Fin.

意外な遊び方

著者・瑞穂

猛暑日になりそうな真夏の昼下がり、東京にギラギラと強い日差しが照りつける中、練馬区の銀杏商店街にも多くの買い物客が足を運んでいた。このようなときには誰もが喫茶店でちよつと休んで、或いはコンビニで冷たい飲み物を買って、喉の渇きを潤したいものだ。

「ここは喫茶『どんぐり』」

商店街の一角負け犬公園付近にあり、お客様はなかなか入らないものの店の内外は綺麗な喫茶店である。本格的に営業しているわけではなく、マスターの加賀北斗が自宅兼店舗として経営しているのだ。

年齢は30歳前後と若いのが、女性に見える。一般の男性より背は高いが何故か女口調で話し、温厚で優しく、店の経営が赤字であるにもかかわらずそれ程気にしないちよつと変わった人だ。

とある日曜日のお昼過ぎに3人の高校生が、空席の目立つ店内でアルバイトしていた。

「はーっ。いつもながらお客さん来ないね」

溜息をつきながら虚空を見上げているのはこのSSの主人公、都立潮見高校2年生の西沢歩である。短めのツインテールでルックスはまあまあ良く背も高い。周りから普通、普通と言われるが人当た

りもいいし誰に対しても優しく、自分の想いを物怖じせず積極的に打ち明けたり、ピンチに陥っても人に頼らず自ら考えて実行に移したりする一面も持っている。

しかし彼女の言うように『どんぐり』にはお客様がなかなか入らない。人通りが少ない通り沿いに立地しているからなのか、はたまた、昔から繁盛していないだけなのか、特色ある営業ではないのか、それとも他に理由があるのかについては著者も分からない。

「そうですね、お客さんが来てくだされば働き甲斐がありますね」
「難しいんじゃない？」

丁寧語で話すのは三千院家に執事として仕え、白皇学院高等部2年生に在籍する綾崎ハヤテである。青髪の女顔であり、幼少の頃から年齢を詐称しながらアルバイトで培った鋼の筋肉を持つものの、同年代の少年と比較すると身長はやや低い。見た目通り誰よりも温和・温厚であり家事も得意とする天然ジゴロである。

なおこの2人は、ハヤテが潮見高校に在籍していた時からの同級生であり、現在も親友である。

歩の問いかけ、或いは愚痴に反応した少女はハヤテと同様に白皇学院に通い、1年生時から生徒会長を務めている桂ヒナギク。歩とほぼ同じ高さの身長であり、腰まで届くほどに長い桃髪が目を引く。いつも定期試験でほぼ満点を取るくらいに成績優秀であり、人当たりも良いので学院のアイドル若しくは高峰の花のような存在として注目されている。とはいえ癒し系というわけではなく、男勝りで負けず嫌いな特徴を持つ。

なお3人が初めて顔を合わせた1月以降、歩とヒナギクは無二の親友であり、この2人の少女は共に、ハヤテへの初恋相手で恋のライバルだ。

しかし残念ながら今回の合同本の規約上、詳細を述べることはできないので、恋愛面については割愛させていただきます。

◇ ◇

閑話休題。3人が暇を持って余して談笑しているところへ来客を知らせるチャイムが鳴る。慌てて全員がドアの方へ目をやると、そこにはよく見知った顔があった。

「こんにちは―」

「いらっしやいませ。あ、千桜さん!」「ハル子!」「千桜さん!」

「綾崎くんはヒナに西沢さん!」 どうしてここに?」

千桜も歩たちもお互いに見た光景に目を疑った。千桜はヒナギクたちがアルバイトしていたのは知っていたが、よもやここだとは知らず、3人は来客が珍しく、且つ千桜がこのような店にはこれまで足を運ばなかったので驚いていた。

「僕はマスターからの依頼ですし、西沢さんは僕と同期です。ヒナギクさんについては理由を知りませんが、僕よりずっと前からここで働いているみたいですよ」

歩とヒナギクが返答を渋っていたところ、ハヤテが代表して千桜の問いかけに答えた。

この答えに歩はノーリアクションであったが、ヒナギクは納得いかないようであった。というより、勝手に答えられて癪に障ったようだ。

「ハヤテくん、なんでそれ知っているの?」

そう発言するヒナギクの顔には少々怒りがこみ上げてきた。

「いえ、僕がホワイトデーのお返しをここで作らせていただいた時にヒナギクさんとマスターが話していたじゃないですか。古い付き合いで以前からバイトしているって」

この台詞にヒナギクはハッとして過去の自身の発言を思い出していた。そうするうちに、その恥ずかしさで顔が染まってきた。

「た……確かにそうだったわね……」

だけどハヤテくん、私が答えてもいないうちに決めつけた返答をするのはやめてもらえないかしら?」

「す、すみません」

負けず嫌いのヒナギクにとってはハヤテだけの言い分、言葉通りで終わるよりは、勝った気分が終わりがたかったのである。ハヤテに謝罪させ、正論で締めくくった。

「じゃ、じゃあこの話は終わり、ね。千桜さん、お好きな席どうぞ」

頃合いを見計らい、歩は話を打ち切って喫茶店業務を再開し、千桜も窓際の席に着いた。

やがてハヤテが千桜のもとへ注文を取りにいき、店内の雰囲気は落ち着きを取り戻すのであった。

「ご注文は？」

「じゃあ、アイステイーをひとつ」

「レモンとミルクどちらになさいますか」

「ミルクで」

「かしこまりました。アイステイーのミルクをおひとつですね、少々お待ちくださいませ」

注文を受けたハヤテはカウンターに引込み注文の品を作ると、素早くヒナギクがそれをテーブルに持っていった。

「お待たせいたしました、アイステイーのミルクをおひとつお持ちしました」

「ありがとう」

注文して30秒も経っていなかったが、千桜の表情は驚愕していなかった。まあそうだろう、3人とはアパート、ゆかりちゃんハウスに同居しているので今更驚くようなことはない。敢えて言うなら、ヒナギクとはクラスメイトであり同じ生徒会で仕事を共にしている。ハヤテともクラスメイトであり、生徒会活動を手助けしてもらっているだけでなく、ゆかりちゃんハウスにおいて家事全般及びお弁当の準備やマッサージ、介護などあらゆる身の回りのケアを手際よくしてもらっているのだ。

「しかしこんなことなら、アパートで作ってもらった方が遥かに安上がりだったな」

「まあそうでしょうね、アパートでは僕にできることなら、みなさんのお役に立てることなら何でもさせていただきますから」

千桜の漏らした苦笑にハヤテも苦笑で返していた。

その後4人で最近の状況について談笑しているところで、歩の一言により大きく話題が転換する――

◇ ◇

「ところでみんな、ちょっといいかな？」

歩の言葉にハヤテたちは視線を向ける。

「話すだけっていうのもなんだし、ゲームしないかな？ 携帯ゲームじゃなくて、しりとりや回文、早口言葉、倒文とか言葉を使ったゲームを」

「言葉遊びですか？ いいですね」

「懐かしいわね」

「確か回文は上から読んでも下から読んでも同じ言葉になるんだっ
たな」

提案に最初は目を丸くしたハヤテ、ヒナギク、千桜の3人も乗ってくる。

「そう。もしやるなら、勝った人はお金と恋愛以外という条件でもひとつ、お願いを叶えられるというのはどうかかな？」

歩の提案に3人は俯いていたが、やがて顔を上げたハヤテが受諾し、ヒナギクと千桜も了承した。

「面白そうですね、いいですよ。お金や恋愛以外であれば、いい機会ですし、楽しみましょう」

「そうね」

「私もいいぞ（勝てばタダで飲めるかもな。今ちよつと懐が寂しいから）」

「じゃあ決まりだね。お願いは勝った後に決めるということで。」

まずは早口言葉からいいかな」

「いいわよ。それじゃあ始めましょうか」

返事するヒナギクの瞳は珍しく燃えていなかった。それもそうか、いくらお願いが叶うからといえどゲームなので、親睦を深め楽しむのが目的だ。それに彼女の念願であるハヤテとの交際ができるわけでもない。

順序は現在座っている位置から時計回りに、即ちじゃんけんで負けたハヤテからヒナギク、千桜、歩と決まった。

なお出題者及び審判はマスター。

知的なヒナギクと千桜、社会経験が豊富であり社交的なハヤテ、普段は目立たないがここぞというときに力を発揮する歩と、タイプは非常に異なるが舌の滑らかさはどうか。

果たしてどのような結果が待っているのか。

「じゃあいくわよ。まずは手始めに……」

マスターが出した最初の言葉は――

“青巻紙 赤巻紙 黄巻紙（あおまきがみ あかまきがみ きまきがみ）”であった。

「ハヤテくんからどうぞ」

「は、はい、では……」

最初の順番なのでやっぱり少し緊張しているようだ。深呼吸して心を落ち着けると、

「あおまきがみ あかまきがみ きまきがみ」

何のことはない、言い終えると普通であった。小さく安堵の溜息を漏らしていた。

「あおまきがみ あかまきがみ きまきがみ」

「あおまきがみ あかまきがみ きまきがみ」

続いてヒナギクもあっさりクリアして、千桜は少々嘔んだものの言い間違えることはなく、歩もすんなりと言えた。

「全員クリアね。因みにこれは昔ながらの早口言葉よ」

全員の健闘に拍手するマスター。

「じゃあ次も昔ながらのだけど、今度はちよつと難しいわよ」

マスターの言葉に4人の表情から安堵の色が消え、次の問題に対する緊張と楽しみが芽生える。

「いくわよ」。

“裏庭には2羽、庭には2羽鶏がいる（うらにわにはにわ、にわにはにわにわとりがいる）”

全員が眉を顰め、少々呆れているようだが気を取り直して再開することにした。

「うらにわにはにわ、にわにはにわにわとりがいる」

「うらにわにはにわ、にわにはにわにわとりがいる」

「うらにわにはにわ、にわには……しまった噛んだ！」

「うらにわにはにわ……にわにわ……いけない間違えた！」

イントネーションは異なるものの、同じ音である「にわ」と「には」を続けて言うからなのか、若しくは同じ2つの言い方が多いからなのか、千桜と歩は最後まで言えなかった。

ただ両者の表情は歩が苦笑を浮かべていたのに対し、千桜は俯いており対照的であった。

「あらく歩ちゃんと千桜ちゃんだったかしら？ やっぱり難しかった？」

「ドンマイです、お二方。気にせず頑張りましょう！」

「そうよ、気にしないで」
マスターとハヤテ、そしてヒナギクが慰めるが肝心の対策は示されない。

そこでハヤテがアドバイスしようとしたものの、会話で安易なアドバイスをしようとするとかえって嫌われるのを身に染みて分かっているの、口を開かない。

以下は著者が最近読んだ本の内容を含むのを予めお断りしておく。
男性は人に教えることが大好きで、自分の知っている分野に話及ぶと黙っていらなくなる人が多い。だから好意で相手に教えるのだが、実はそれが相手を不機嫌にさせてしまうのである。

何故相手方が不機嫌になるのか、恥ずかしながら著者にもつい最近まで分からなかったが、答えは相手の意識、気持ちにあった。

早口言葉を上手く言えない千桜と歩には、「自分には苦手だ」「なんだか今日は上手く言えない」、或いは「苦手なりに楽しもう」「勝てばひとつ、願いが叶うんだ」という気持ちがあるはず。

そこで前者のようにネガティブな発想であれば、「早口言葉ってつまらない？」若しくは「ちよつと飲んで気分を落ち着けては？」と相手の気持ちを分かかってあげたり刺激しないであげたりする事が重要だろう。因みに「つまらない」という気持ちであれば、彼女はそんな気持ちでも参加してくれているので、「つまらない早口言葉に付き合ってくれる千桜さんは優しいですね」と返してあげると千桜は気分一新で続きに参加してくれるのではないか。

一方後者、ポジティブ思考であれば「楽しみながら覚えましょう」若しくは「そうですよ、勝てばご褒美が貰えるんですよ。頑張りましょう」と返せばいい。そうすることにより士気が高揚し、周りの空気も良くなるだろう。

したがってマスターの言葉は千桜に、ハヤテとヒナギクの言葉は歩によく響くのだ。

というわけで1度また全員が冷たい飲み物を口にして息抜きしてから、「僕ボブ 僕ボブ 僕ボブ」や「炙りカルビ 炙りカルビ 炙りカルビ」といった連続で言うのと噛むような早口言葉を、また「レモンとメロンとルミオンとルミオロメン」、「マグマ大使のママはマママグマ大使」、「右耳にミニニキビ」といったそのフレーズ自体が面白い早口言葉を言って楽しんだ。

最初はなかなか滑舌に言えなかった千桜も元々の聡明さと冷静さから、歩も楽しむだけではなく覚えたという意志からだんだんと滑らかに舌が回るようになってきた。また、事が進むにつれて最初は燃えていなかったヒナギクの瞳も生来の負けず嫌いが発動してか、いつの間にか燃えていたし、ハヤテも楽しみながら場の空気に影響されて熱くなっていった。

間違っていた時は各々がいちいち指摘するのではなくそのまま流していたので、その場の空気が悪くなり仲が壊れる、というような事態にはならず一安心だ。



結局、最も舌が滑らかだったのは、途中で嘔まなかったのはハヤテであった。彼が幼い頃から社会において様々な業種で働いていたので、頭脳明晰なヒナギクや千桜以上に雑学に詳しく、社交的な性格もプラスに働いたのが勝因だ。また、負けた歩にしても知らないなりに早口言葉を覚えようと、話そうとしていたので、これだけでも全員にとって楽しいひとときだと、やって良かったと後味のいい遊びになった。全員が笑顔であったから。

その雰囲気の中勝ったハヤテが望んだものとは……。

「すみません、ちょっとよろしいでしょうか」

「何かな？ 改まって」

「自分で言うのもなんですが、僕は幸運に恵まれていません。だから僕は、幸運でありたい、或いは運のつくものが欲しいんです。

そこで小耳に挟んだんですが、切れるとお願いが叶うという、ミサンガを編んでももらえませんか？」

ハヤテの意外で乙女なお願いに歩たちは顔を見合わせたものの、彼の説明に納得した。確かにハヤテは幸運とは無縁でトラブルにいつも巻き込まれている。

「そうね……不幸から解放されればハヤテくんは幸せな人生を過ごせるでしょうね」

「ああ。綾崎くんにはお金よりもそっちの方がいいだろう」

ヒナギクと千桜も賛同し、歩も頷いたので確定した。

ミサンガとはお願いを叶える為に身につける手芸品であり、ファッションとはちよつと異なるのではないかと著者はみている。自然に切れた時にお願いが叶うとされているもので、両手首若しくは両足首いずれかの部位に身につけるとされているが、つけた部位により、また糸の色により意味その人の願う内容も変わっていく。勿論、複数の願いが叶うのであれば色を組み合わせても構わない。

例えば友情を深めたいというのであれば、オレンジ色、黄緑色が適当である。それに絡んで優しさとして黄緑色以外にも緑色、思い遣りの紫色、落ち着きの白色、爽やかな青色や水色も候補に挙げられる。そして編んだ、若しくは市販のものを利き足の足首につけるのが最適とされている。詳細はこのSSの終わりにURLを記載さ

せていただく。

「それじゃあ、私が編んであげようか？」

「え、西沢さんが☹ 悪いですよそんなの」

「気にすることないよ。だって私たち友達でしょう？ ねえヒナさん、千桜さん？」

ここ一番に見せる歩の笑顔にハヤテは赤面している。一方のヒナギクと千桜も歩の意図を汲み取ったようで、

「歩の言うとおりにね。そういうことであれば私も協力させてもらうわ。ハヤテくん、楽しみに待っていてね」

「そうだな、私も微力ながら力を貸すよ」

3人の心優しいコメントを聞いてハヤテは涙を零した。

「み……皆さん……こんな僕の為にここまでしていただいてどうもありがとうございます」

「泣かないの、ハヤテくん。泣き続けると幸せが逃げちゃうよ！」

いつもながらの優しく穏やかな口ぶりとはかけ離れた、歩にしては珍しく叫ぶような口ぶりであった。意外な言動に周りは一瞬呆気にとられたが、

「と……とにかく、ハヤテくんの要望に応えて、ミサングを編んであげる。だからどんな願いか言ってみて！」

我に返って顔を赤く染めながら言う歩にハヤテは何かを感じたようでも、やがて歩の手を取り満面の笑みを向けた。

顔を赤く染めながら吠えていた歩に何かを感じたようで、やがて

歩の手をとり満面の笑みを浮かべた。

「ならば借金返済もありますし、金運を身につけたいですから黄色いミサングがほしいですね。よろしければ編んでいただけませんか。」

上手く編めなくても構いませんから、どうかよろしくお願いします、西沢さん。期待していますよ」

同様にヒナギクと千桜の手をとり、

「ヒナギクさんと千桜さんも、どうかよろしくお願いします。時間がどれだけかかっても結構ですから」

異性に手を握られたからなのか、少女たちは顔を赤く染めていた。



「早口言葉でまさかこんなに盛り上がるとは思わなかったわね。この雰囲気なら次の回文も楽しめそうね」

「そうだな。それじゃあ気持ち冷めないうちにやろうか」

「そうですね」

「うん！」

ヒナギクの言葉に残りの3人も同調した。

因みにここからは審判する必要があるないので、マスターは見学することになった。

ところがここで、ルールを根本からとは言われないが覆すような発言がヒナギクの口から飛び出す。

「ねえ、ちょっと思ったんだけど。3文字なら名詞の回文はいくつか思いつくんだけど、それ以上だと殆どないじゃない。だったら名詞に限らず文でもいいんじゃないかしら？ “留守にする（るすにする）”みたいな」

ヒナギクの意見に全員が納得した。確かに名詞だけでは数が限られているし、言葉も短い。3文字超だと微々たるものだ。だが名詞のみという障害を取り払い、修飾語を含んだり文にしたりすれば頭の中で自由な発想ができるので必然的に懸念も払拭される。

ということ、短くとも5文字以上の文構成のみの回文と定められた。その他、早口言葉の時とは異なり、1分の制限時間内に作れなくとも失格にはならない。このルールのおかげで、早口言葉のときとは異なり、最後まで勝負とは無縁のいい空気の中で過ごせることになる。付け加えると、勝負ではないので、勝ったらお願いが叶うという条件というかご褒美も廃止するという事で合意した。普段から文字に親しみのあるヒナギクと千桜は優位に立つが、小説をそれ程読まない歩には難しい。

「順番はさつきと同じということで、それじゃあハヤテくんスタート！」

歩の一言で幕を開けた――

ゲーム開始までしばらく時間があつたとはいえ、アドバンテージらしいものがないのでハヤテには苦しい。ただでさえ上から読んで下から読んでも同じ言葉というのは僅少なので、なかなか思いつ

かない。文を作るのであれば、柔軟な発想がカギとなる。

「えーと……“英語言え（えいごいえ）”」

それでもなんとか制限時間間に言うことができた。

2番手のヒナギクも悩んでいるようだが、彼女が猫に興味があり、そこから連想したようで、

「あ……“猫の子ね（ねこのこね）”！」

叫んだ拍子に人差し指を突き出し、直後に安堵の表情を浮かべた。3番手の千桜は趣味が読書というアドバンテージがあつた為か、はたまた頭の回転が早いからなのかすぐに口から出た。

「じゃあ次は私の番だな。“確かに貸した（たしかに貸した）”」

千桜の反応の早さに全員が驚愕した。しかし次の瞬間、さらに驚く。

「最後は私ね。“ビキニの子のニキビ（びきにのこのにきび）”」

「ちょっと待ってください、お二方どうしてそんなに早く言えるんですか？」

思わず問い質したハヤテに千桜と歩は淡々と、

「ルールの説明から私が答えるまで時間があつたからだよ」

「うん、それにさつきの早口言葉の中で、右耳にミニニキビ”ってあつたよね。ニキビを逆から読んだらビキニって読めるから、偶然回文ができたんだよ」

苦笑する歩の台詞にハヤテは恥ずかしくて赤面した。

ところで、先に答えた者を待っている時間があるから有利・不利

は関係ないのでは、と思うかもしれない。だが今のを見る限り、単純に言うだけの早口言葉とは異なり、回文は待ち時間が長くなる後の方で答える者が有利のようだ。

まあ、全員が同じような間隔、テンポで言えるようになれば、特定の誰かが有利になったり不利に陥ったりすることはなくなるだろう。とはいえ現状ではハヤテとヒナギクの2人が、特に切り替えが遅く順番の早いハヤテが不利なのは紛れもない事実だ。

しかし勝負という視点からするとその通りだが、現在はみんな楽しんでるので論じる必要はなかったかもしれない。

閑話休題。その後も下書きしたり、若しくは頭にピンと浮かんだり偶然思い浮かんだりして“完全不完全か（かんぜんかふかんぜんか）”“預金満期よ（よきんまんきよ）”“色白い（いろしろい）”“この子供何処の子（このこどもどここのこ）”など、短いものから長いもの、面白いものが4人の口から出てきた。

前述したように勝負とは無関係であったものの、早口言葉のときと同様に全員が笑顔であった。



著者はTV・携帯ゲームをしないのでそちらの方面は疎いが、遊び方にも様々ある。

今回のSSで扱った言葉遊びもそのひとつだが、他にも例えば音

楽を聴いて歌手名や曲目を当てたり、屋外や体育館で身体やボールを扱ったりするのも遊びの一種だろう。

それが自分ひとりだけではなく友人や同僚、或いは恋人と一緒に遊べば、その人達と交流できて絆をより深めることができるだろう。今回の歩、ヒナギク、ハヤテ、千桜、マスターのように。全員が笑顔で「またやりましょう」と約束して終われたら、きっと最高のひとときになる。

「みんな今日はどうもありがとう。みんなと楽しいひとときを過ごせて、仲良く過ごせて幸せだよ」

「そうね。また機会があればやりたいわね」

「そうですね。こうして皆さんと過ごせて良かったですよ。今日はどうもありがとうございました」

「ああ。みんなありがとう」

全員が笑みを浮かべ、楽しい雰囲気の中、日曜日の昼下がりのひとときは過ぎていった――

F i n .

おまけ

ミサンガ自体、そして色の意味についてURLを記載させていただきます。

<http://xn--u9jwc2e9a3pne728uvnxb.com/> (ミサンガの作り方や意味などが詳しく載っています)

<https://joox.jp/4823/> (ミサンガの色の意味についてはこちらもお勧めです)

クリスちゃんⅡ滅入る

著者…ピーすけ

暗闇を恐れるように轟音高らかに瞬くマズルフラツシユ。

四方から一点に収束する弾丸の雨。さながらそれは決して籠の中の鳥の生存を許さぬアイアンメイデン。

しかし殺意を一身に集めながら、木漏れ日に揺蕩う旅人のように涼やかに、しかし仁王のように荘厳な出で立ちのまま、微動だにせず閃光を暗く切りぬく影が一つ。

この影を、駆逐する。ただそれだけにしては、余りに過剰すぎる火力であった。

一斉射が終わり、残されたのは一寸先さえ見通せない程の重苦しい闇と、肌を刺すような冷たい沈黙のみ。

しかし静寂は、余りにも冥府の大口を連想させた。男たちは圧倒的に優位に立ちながらも、いや増す不気味さを払拭することが出来ない。

耐え切れず、誰かが口を開いた。
恐る恐ると、それに応える声。

ほんの僅かの安心、弛緩。

そしてそれを裏切って暗黒を祓ったのは、神聖に輝く十字の閃光。

「党」最高の武術。無謬無敵の中距離格闘技、個人戦闘術のキワミ。即ちガンⅡカタを収めたクレリック達の上に所有が許されたク

ラリック・ガンから放たれる九ミリパラベラムの宣告。銃口から迸る閃光が描く十字の印は、あらゆる呪いを浄化せしめる正義の烙印なり。

閃光に照らされるクラリックの白貌は、瞑想するように瞼を伏せたまま、照準すら見ていない。密室に満ちる苛烈な銃声の中でクラリックの表情だけが、沈黙を維持し続けている。

そも、ガンⅡカタの理論は統計学に端を発する。

那由多にも届こうかという銃撃戦のデータから割り出した戦術予測。

敵の配置と状況に応じて基本一〇八つのカタから、演算し、最適な解をリアルタイムに算出する。

故に、一度対象の位置関係さえ把握してしまえば、ガンⅡカタに照準という煩わしい工程は存在しない。

即ち闇こそは、クレリックにとって絶対の領域なのである。

一度ガンⅡカタ使いの間合いに入ったが最後。確率という神に支配された凡夫は、ただその絶技による絶対の死のみを安息として肅々と受け入れるしかない。

だから、男たちは幸運だったと言える。

彼らが相対するのはガンⅡカタの化身とまで呼ばれる男。史上最高のクラリック、ジョンⅡプレストン。

ジョンは、一切の躊躇なく、一片の悔いもなく、ただ機械的に処理していく。

そこに、痛みと呼べるほどの苦しみすらなかった。結末が確約さ

れたこの場においては、それは何にも勝る慈悲であったであろう。

本来は休み返上で鍛えに来たはずなのに、これでは禅を組むのと変わらない。

「で、なんでアタシはまたぞろこんなB級映画を観てるんだ？」

時代遅れのCRTの真ん前に正座したまま、雪音クリスはふと哲學の境地に至りそうになる。

果たして自分はとんでもない馬鹿なのではないだろうか。と。

この映画自体を馬鹿にするつもりは、無い。

ガンIIカタという発想自体はぶっ飛んでいても、飛び道具を用いた近接戦闘手段として、CCC以外の解を提示してくれた点は、感謝している。

彼女の纏う戦闘用ギア、シンフォギア「イチイバル」も大元は弓の宝具。

遠距離戦闘には優れていても、至近戦となればどうしても「ガングニール」や「アメノハバキリ」に劣る。

その点、至近戦を前提とするガンIIカタはまさしくうってつけだった。

あのクソオヤジに乗せられて真似したこのガキが考えたみたいな戦闘術に、しかし救われたことが多いのもまた事実。

しかし、だ。

わざわざ同じ映画を二度も見する必要はあるまい。

日曜日の昼下がり。扇風機のチープな熱風だけでもうんざりしてしまうのに、時間の無駄さがより一層クリスの神経を逆なでする。

——曰く「貴様に足りないのはガンIIシンだ」

クソオヤジの言を頭の中で反芻する。

ザンシン即ち残心。残身。残心。残心。

呼吸、調息を重要視する東洋武道では確かに有意義な概念ではある。

なるほど、暴力の心得はあっても武の心得に疎いクリスには、そこから得られることも多かるう。

などと、暑苦しい勢いに乗せられてビデオテープをデッキに突っ込んだのがほんの数分前。

きつと、自分も夏の暑さにやられていたのだろう。とクリスは冷静になって思う。

かといって、一度やると決めたことを途中で放り出すのも、何かに負けた気がして嫌だった。

結局、スタッフクレジットまでを早送りもせずに見切ったクリスは、痺れた足を延ばして「だあああーっ」と声を上げて息を吐いた。

「終わったか」

ぬつと、クリスの顔に影が掛かる。

筋骨隆々むさ苦しさがはち切れんばかりの大男。名を風鳴弦十郎。クリスに映画を見させた張本人である。

「んああ。ようやくな。もう少しで空でも浮かんじまいそうだった
が」

「ふむ、得るものはあった。ということか」

会話にならない。「ねーよ」と返す元気すらなかった。

「よし。ならば、往くか」

「……は？ え？ はあああああああッ!!」

首根っこに伸びた手を払いのける間もなく、子猫よろしく弦十郎にひよいと体を持ち上げられるクリス。バタバタと宙づりのまま犬かきしても、クリスの矮躯がぶらぶら揺れるだけで弦十郎の腕自体はピクリともしない。

「行くなってドコへだよッ!! てか、下ろせ!!」

クリスの抗議に弦十郎は太陽さえも鬱陶しがりそうな笑顔で即答した。

「無論、修行だッ!!!!!!」

「わかった。わかったってば!! だからまずは下ろせ!! おろしてくれ!!」

二人の余りの喧しさに、近くで喚いていたアブラゼミが小水を漏らしながら飛び去った。



「で、だ」

青い空、河原。絶好の青春ロケーション。

夏だというのに長袖長ズボンのジャージに身を包んだ弦十郎。

対するクリスは、上は同じく長袖ジャージだが、下半身だけは暑さに耐えきれずブルマだ。

別に、どこかの需要を刺激したかったわけではない。上も半袖にしたいのはやまやまだったのだが、弦十郎が長袖に拘ったのである。

「なんで長袖じゃなきゃだめなんだ？」

「喝あああああッ!!」

千里先まで轟き渡りそうな大喝。

クリスは目の前に星が散った。

弦十郎は不屈な弟子に極意を授ける師のごとくやれやれと首を振る。

「そんなもの、袖の中に隠したマガジンを、カッコよくリロードするために決まっているだろう!!」

クリスは確信した。

このオヤジ、馬鹿である。

しかもいつもに輪をかけて。

「……湧いてんなあ」

「そうとも。俺の血は今沸騰せんばかりに滾っているッ!! チャン
ベールアクションの熱に浮かされずして何が男か!!」

心底女に生まれてよかったとクリスは思う。

ああ、本当に頭が痛い。せめてクラシックじゃなくて蝙蝠に影響
されてくれているならばまだ静かだったのかもしれないのに。

「では、まずは復習だ。貴様に足りないものは、先刻言った通り」

「残心。だろ」

投げやりなクリスの返答も、何もかもが弦十郎に燃料を灌ぐ結果にしかならない。

「然り。残身とは即ち終わりであり、始まりだ。一年の計が元旦にあるように」

弦十郎が、クリスにモデルガンを放って寄越す。ベレッタ・カスタームが二挺。

こんなもの用意する金があるなら数回に一回テープを巻きこむオンボロをいい加減DVDにでも変えればよかるうに。

「お前も観たはずだ。ガン⇨カタの残心を」

「あったか? ンなの」

「犬」

「……アレか?」

「アレだ」

「……マジで？」

「大マジだ」

「残心じゃなくて決めポーズじゃねえか!!」

「痴れものッ!! 何のために歴々の英傑たちが登場と同時にポーズを決めると思っていたのか」

たぶんそれはちげーぞ。

とは言えなかった。

「では、やってみろ」

「……ああもう、わかったよッ」

ヤケクソだった。

両の腕を突出し、右手の銃口を上、左手の銃口を下に。強そう。しかもかっこいい。

口にごそ出さないが、心の中で何度でも言ってる。

馬鹿だ。

「腋が甘いッ」「手を抜くなッ」

入道雲より空高くへ、弦十郎の喝が響き渡った。



「ふむ。まあ、良しとしよう」

小一時間以上カッコイイポーズの練習をさせられて精神的にズタボロになったクリスをみて、どうにも拗れた方に理解したらしい弦十郎が、満足げに頷いた。

嫌な予感がしても、逃げる手が思い浮かばない。帰りたい。ものすごく。

「では、後は実践あるのみだな」

弦十郎が構える。

「俺が手ずから、ガンカタを叩きこんでやる」

「素手でか」

「何の問題があるか。俺がガンカタだ」

イエス。ツッコミ。無駄。思考。停止。

同じアホならハードラックとダンスつちまうべし。

「掛かってこい」

大股に足を開いて、拳を突きだす構え。まごうことなきカラテである。どっからどうみても。

「v p a —————」

色々限界を超えてブチ切れたクリスが、なぜかロシア兵のごとく咆哮しながらベレッタを振り回す。

無論弾は出ない。が、弦十郎とクリス程の使い手ともなれば、殺気で判断すれば良いだけのこと。

カカカとトリガが引かれる。

ブローバックしないオートマチックのトリガはリボルバーのごとく鈍い。

しかし、曲撃ちもかくやの高速三連射。

弦十郎は前に突き出した足をさらに半歩大股に開く。

上体を捻り、殺気の射線から間一髪を見切り、ハッケイ。震脚。調息は十分。

「括目せよ」これがッ

弦十郎のたくましい体に蓄えられた慣性が、今爆弾のごとく解き放たれる——

「ガンカタキイーンック!!」

蝙蝠に影響されてればと思ったクリスが愚かだった。

同じバイク乗りでも、どうみてもバツタのほうだった。

「そういうのはトンファーでやれェ!!」

「ほあちよーー!!」

青い空。緑の芝。煌めく水面。

夏の原風景に、大男が怪鳥のごとく高らかに舞う。

おわり

休日に関する小話

著者..雪月

この場所にたどり着いてから、どれほどの時間が経ったのだろう。もうずいぶんと長い時間が過ぎていくようにも思えるし、大した時間が過ぎていないようにも思える。

夏の刺すような熱い日射しが、木々の隙間を縫うかのように自分を貫き、じりじりと肌を焼く。

あまりの暑さに我慢できず、バッグに詰めたペットボトルの蓋を開け、わずかに温くなった飲み物を勢いよく流し込む。

その反動からか、肌に玉のような汗が噴き出す。たまらず汗で張り付いたシャツの襟をつまみ、軽くはためかせて風を送る。

ああ、涼しい。

この程度のことでも涼しくなるなんて、つくづく感覚というモノは主観だと思う。

「暑いですね」

すぐ隣にいる麦わら帽子をかぶった女性が声をかけてくる。

その言葉に「ええ、本当に」と苦笑しながら返す。

大変になると分かっていたとはいえ、ここまでとは、と自分の想像力の足りなさに後悔する。

いや、足りなかったのは想像力ではなく覚悟か。

こうなることは分かっていた。それにもかかわらずこの地へ赴いたのは自分自身の意思だ。

そのくせ、いざこの状況になってから後悔するなんて、自分で自分を馬鹿なんじゃないかと思う。

額に浮かべた汗を拭き、数日前に先輩から受けた言葉を思い起す。

やめておけ。

その言葉を口にした先輩の顔は、心底呆れていたようだった。

すみません、先輩。忠告をろくに聞きもしなくて。

今更になって先輩に対して心の中で詫げる。

きっと今頃、馬鹿な奴だと言って呆れているだろう。

いや、あの先輩のことだから、特に気にしていない可能性の方が高い気がする。

どちらにしても、自分にとってはもう遠い話だ。

もうここに来てしまったのだから。

もう会えないかもしれないから。

今の自分に出来ることは、ただ流されるままに歩を進め、終わりの見えないこの場所に留まり続けるだけ。

自分の意思も関係なく、ただただ、ひたすらに……

でも願うことならば……

もう一度、会いたい。

て思わないじゃないですか！」

その態度にますますヒートアップしたのか、言葉に熱がこもる。

「散々TVで宣伝してたけどなあ」

それを冷ますかのように、緊張感のない言葉を発する。

これがこの二人にとってはいつものやりとり。

活動派の後輩に、のんびり屋の先輩。

一見すると反りの合わなそうな二人だが、趣味が合うのか馬が合うのか、不思議と一緒にいることが多かった。

「というか、そんなに言うんなら行かなければ良かったんじゃないか」

「いやあ、だって初公開ですよ。やっぱり生で見たいじゃないですか」

後輩が先日訪れた場所は美術館だった。

日本初上陸という絵画を見るためだけに、普段行きもしない美術館にわざわざ出向いたらしい。

しかし、日本初上陸という話題性に加え、公開期間が約1ヶ月という短さのために、連日の超満員を引き起こしていた。

「っていうことが、昨日あったんですよ！」

空調の入った部屋の中に、声が響く。

「うーん、ちょっと何言ってるかよく分からないな」

ページをめくりながら、興味なさそうに言葉を漏らす。

「だって世間的には平日ですよ、平日！ なのにあんなに混むなん

二人は夏休みという長い休日に入っているが、世間的には平日である。勤め人なら大抵は仕事が入っているはずだった。それにもかかわらず満員なのだから、いかに期待された企画展であったかがうかがえる。

「でも4時間待ちは流石にキツかったなあ……」

その結果が、4時間という非常に長い待ち時間だった。有名なテーマパークやレストランでも、それだけ長い待ち時間になることは稀だろう。

「けど、やっぱり話題になるだけのことはあると思います、良かったですよ、凄く」

具体的にどこが良かったのかと言われると……答えられないんですけど。と、はにかんだように笑う。

「先輩も来れば良かったのに」

「いやー、4時間待ちとか絶対嫌だ。大体、直接見たって絵の善し悪しなんて分かる気がしない」

結局のところ、素人にはこうやって画集を見るだけで十分なのよ、

と手に持った大判の本を掲げる。

それに対し、誰が買ってきたと思ってるんですか……と、後輩は愚痴を漏らした。

「そういえば、先輩昨日何やってたんですか」

「博物館に行った」

その回答に、一瞬言葉を失う。

「……え？ 博物館って……」

「美術館の隣にある奴」

その驚愕の回答に、開いた口がふさがらない。

「いや、いやいや、だったら一声ぐらいかけてくれても良かったじゃないですか！ ていうか、この間はそんな暇なんて無い、とか言ってますでした」

「行く暇はあっても4時間も並ぶ暇はない」

「ただ面倒くさいだけでしょ」

「それが一番重要」

なんか納得行かない……と、独りごちる。

確かに4時間待ちは長かったと思うし、それで疲れたことも事実だ。

けれど、少なくともあの展示物にはそれだけの価値があったと、直接見て思う。

さらに言えば4時間待ちなんてそうそう何度も経験できることでは無い。無駄と言えば無駄だが、そんな無駄が出来るのが休日の特権だ。

暇があったのなら、付き合ってくれても良かったろうに、興味が全くなかったわけでは無いのだから。

そんな言葉を頭の中でぐるぐる回しながら、軽く先輩をにらみつける。

「博物館は良かったぞー、全然混んでなかったし、企画も面白かった」

もつとも、そんな様子の後輩を、先輩は気にもとめないのだが。

これもまたいつものことだと、諦めたようにため息をついて、会話を続ける。

「ああ、古代ギリシャ展でしたっけ？ それも興味あるなあ」

「まだ開催期間あるから、行けば良いんじゃないか」

そうですねー……力弱く返答しながら、こう続けた。

「先輩、一緒に行きませんか？」

「え、もう一回見に行く理由がないんだけど」

「でも、美術館で隣で並んでいた人、企画展見に行くの三回目だつて言っていましたよ」

「……4時間も並ぶ企画展をそんな何回も見に行くの」

ちよつと理解できないな……と言葉を漏らしながら、画集を読み進める。

そんな二人のいつも通りのやりとりと、静かなクーラーの音が流れ、太陽は昇っていく。

暑い暑い夏の休日。

二人の休日は、今日もまた過ぎていく。

「で、結局行ってくれるんですか？」

「ん？ 嫌だよ」

「ですよー」

これもまた、いつも通りのやりとり。

-fin-



完璧だった。完璧な——はずだった。

久方ぶりと感じる初夏の日差しが、容赦なく私の頭に照りつけてくる。どんどんと気が遠くなるような感覚は、しかしその日差しのをせいでなかった。「彼女」はいつもと変わらない聖母の微笑みを見せながら、悠然とした態度で私に相對している。

「やっぱり。牧村さんも一緒だったんですね」

「彼女」がそう言うと、私の後ろにいた牧村先生は小さな悲鳴をあげた。彼女の落ち着き払った声には、僅かな怒りが含まれているように感じた。

「どうしたんだ、マリア。なんでこんなところにいるのだ？」

——ここに。「今」ここにいないはずがないのに。

最後の本音にあたる部分は、必死に喉の奥へと追いやった。

叫びたかった。狼狽えたかった。だが、動揺は胸の内に隠したまま顔の表には顕わにさせまいと、私は平静を装い続ける。

ここは、白皇学院の中でも辺鄙な場所だ。主要の舗道から外れた森の中にあつて、教室一個分の陽だまりがある場所だった。学生でさえ滅多に来るような場所ではないから、OGであるマリアは確信を持ってここににいることになる。

「そ、そうですね。僕たち、何か忘れ物でもしましたっけ……？」

私の傍らにいたハヤテは、不用意に目の前の彼女へ話しかけた。

彼なりに全力でとぼけて見せたようだったが、彼女にはそんな小細工は通用するはずがない。

「いいえ。私が忘れ物をしていたんです。ほんの五年前に、ここで、

『奪われてしまった』ものを取り戻しに……ね」

彼女は笑顔を絶やさなのまま答える。

『奪われてしまった』というのは『物騒』な言い方じゃないですか。だって——」

「——あら。『物騒』というからには、向こうから『持ってきた』ことを認めるんですね」

「ふえ……いや、そういう意味ではなくてですね……」

言葉が濁しながらしどろもどろとなっているハヤテに対して、マリアは首を傾げておどけて見せた。ほら見ろ、言わんこっちゃない。

「マリア、あまりハヤテをいじめてやるな。忘れ物が奪われたとあつては、誰だつて物騒だと感じると思うぞ」

私が二人の間に割って入る。そして、マリアの方へ向き直った。

「じゃあ、どう言い換えましょうか。——盗んだ、とか？」

「あのな……」私は肩をすくめて呆れたそぶりをした。「そもそも忘れ物が何かさえ、私達は知らないんだぞ」

「——あなたが今後ろ手に隠したDVD」

マリアは言い切った。何気ない仕草でそのままハヤテに渡そうとした両手が硬直する。

「それを返してください、泥棒」

いつの間にか、マリアから笑顔が消えていた。真顔でじいっと、ね

めつけるかのように私を見据える。彼女の赤い瞳は透徹していて、全てを見抜いているような気さえした。

「泥棒とは、ずいぶん言い草だな。これがお前の物だとどうして言える？ それに、お前の物だとしたらこれは何なのか、是非教えてほしいものだ」

「泥棒」という言葉に、私の心は揺さぶられたのだろう。気付けば、マリアに対して啖呵を切っていた。

「証明してみせろ、と。五年前に盗まれた物であるならば、どうやってそれを手に入れたのか。そして、今どうして私の手元にあるのか、と。」

「いいですよ。では、ちゃんと説明したら返してくれるんですね？」

「さあな、内容次第だ」

彼女の問いに、私は目を合わせないまま答えた。

マリアはメイド服の裾を一度払ってから、小さく咳払いをする。

「ナギの持っているDVDは、撮影の記録です。私が白皇の学生だった頃、同級生の牧村さんが私を撮り続けた記録の一つです」

マリアがそこまで言ったところで、私はちらっと牧村先生の姿を確認した。顔は強張ったままだが、マリアの言うことに一々反応を示さないほど気持ちを持ち直しているようだった。

「私は撮られることは本意ではなかったのですが、牧村さんと約束をしました。『管理は厳重にして、決して他人の目に触れさせないこと』という簡単な約束です。それで、当時はここに動画研究部の前身となる小屋があったので、その小屋の金庫に保管していました。『管理

は厳重に』ということで、セキュリティは私と牧村さんだけの指紋認証という徹底ぶりでした。……ですが、三年生の冬のある日。あれは、珍しく雪の降った寒い日でした。記録が纏められたDVDが盗まれました。しかも、セキュリティは破られていないのです。私は早速、牧村さんに聞きましたが、彼女は『知らない』の一点張りです。——ね、牧村さん？」

マリアが視線を牧村先生に向ける。私も彼女を見た。彼女は俯いたまま、わなわなと震えている。心の傷になるぐらい聞かれたのだろうか。

「だから私は、別の結論にたどり着きました。——牧村さんを含んだ人たちが、タイムトラベルをして私の記録を盗んだのだと」

マリアは横目で私を見ってくる。反応を確認しようとするのは明らかだった。

私は眉一つ動かさずに、沈黙を貫いた。——彼女の推理は当たっているのだが。

「いやいや、タイムトラベルなんて！ そんな非科学的な話は有り得ませんよ！」

ここに至って、最初にやり込められたハヤテが口を開いた。彼もついさっき経験しているはずだがこう言っているのは、マリアの理屈を否定したいがためだろう。

「ハヤテ君」

マリアは淡々としていた。

「有り得ない、なんてことは有り得ませんのよ」

「——あう」

何度か口をバクバクさせたあと、とうとう口を嚙んでしまったハヤテ。両肩を落としてしよげこんでいるのが目に見えてはつきりとしていた。だから不用意に突つかかるなど。ずっと震えっぱなしの牧村先生を見習えと言いたかった。

「話を戻しましょう。——未来の牧村さんと誰かが五年前にタイムトラベルをして、私の記録を盗み出した」

「ちよっと待った。なんで複数前提なんだ？ 牧村先生だけという可能性はあるんじゃないのか？」

思わず私はマリアに尋ねていた。興味本位とは言え、あまりハヤテのことをとやかく言えるものではないなと少しばかり反省する。

「簡単な話です。五年前に尋ねたときに、『牧村さんは絶対に盗むはずがない』と念を押したからです。——ね、牧村さん？」

語尾に”♪”がつきかねない軽快なノリで、マリアは牧村先生に尋ねた。牧村先生はビクッと一際大きく震えていた。耳を澄ませば、歯がカチカチ鳴っている音も聞こえている。

「だから、牧村さんの協力者という線で探してみると、一人見つかったんです。M・H・E——帝ハイパーエージェンシー——という企業で多額の援助を彼女にしていた、三千院ナギお嬢様という人に」

「だから、ずっと私の動向をチェックしていた、と。実行する際に、しつかりと現場を押さえられるように」

私の呟きにマリアは哄笑した。可笑しくてたまらない、と言わんばかりにあざとく笑ってみせているようだ。

「いちいちそこまでチェックするわけないでしょ。ただ、あなたが変な行動をしたから後をつけて行ったまでです」

「何なのだ。変な行動とは？」堪らず私は尋ねた。

「今日、『あなた』が学校に行ったことです」マリアは飄々として答える。

「何を言ってるのだ！ 学校に行くのは学生の本分だろうが！」

普段の私自身を棚上げにして、私は激昂してみた。

「ナギ……」マリアは呆れていた。「今日は日曜日ですよ？」

マリアの一言に、私の頭は真っ白となった。

なに？ 今日が日曜日？ 文句なく休める日ではないか！

「普段の夜型の生活で曜日感覚がズレてるのかしら？ 日曜日に部活や生徒会の用事がある人ならともかく、普段から学校に行かない人が日曜日に意気揚々と学校に行ったら、何かあるに決まってるじゃないですか」

私はハヤテと牧村先生とを交互に見廻した。今日の日を提案したのは牧村先生で、今日が日曜日だと教えてくれなかったのは綾崎ハヤテだ。たしかに牧村先生は教員の仕事で忙しいから日曜日が空きやすいし、ハヤテは日曜日に学校に行き慣れているから不審に思わない。

「……さして、DVDを渡してもらえますか？」

私の思考を遮るように、マリアは右手を差し出してきた。その手に、私はDVDを載せる。

完全な敗北だった。——今のところは。

「では、私は先に帰りますね。あ、ハヤテ君と牧村さんには話したいことがあるので、私についてきてください」

この場にいる誰もが、マリアには逆らえない。ハヤテと牧村先生はさすがとマリアについていって、私だけがこの場に残された。

敗北感に打ちひしがれている……つもりはなかった。

今はもう跡形も残っていない小屋の方を見つめ、いまだ鮮明に残っている過去の視界と重ね合わせる。そして、今私のいる位置と小屋の跡地とを結ぶ直線上に位置する木の根元へと歩みを進めた。

その木そのものには何ら特徴はない。青葉を茂らせている銀杏の木であった。その根元に小さな穴がある。数匹の蟻が忙しくその穴に出入りしていた。私が五年前に埋めた時は雪に覆われていたので、そんなことには気付くはずもなかった。

私は近くにあった手頃な石を拾い、蟻の巣穴から少し離れた場所を掘り起こし始めた。

無我夢中だった。額に浮かぶ汗を拭うこともせず、ただ、埋めた時には雪を掘り返すところから始めたから指先が冷たかったな、なんてことを思い出しながら掘り続けた。

やがて、地中から目的の物が姿を見せた。ビニール袋に包まれたDVDだった。

言うまでもない。こっちが本命だった。事前に牧村先生からDVD

について確認していた。後は、万が一の時に備えて埋めておいたのだ。

いつのまにか、私は大声で笑い出していた。

「ははは！ どうだ！ 念には念をとというが、ここまで上手くいくとは！」

「——そうですわね。念には念を入れて、もう一度戻ってきて正解でしたわ」

背後から聞きなじんだ声があった。

振り返るまでもない。私は小さな悲鳴をあげた。

オレンジのシンドルーム

著者..ピーすけ

どこからか香ばしいにおいがほんわりと漂ってきて、心がきゅうと締め付けられる。

わたしは、無性にそうしなければならぬ気がして、はたと足を止めた。

がさごそと靴からカメラを取り出す。

今日びすっかり見かけなくなったフィルム式で、無骨なデザインをしたごつくてだっさいカメラ。

オレンジに眩く染まった風景。ファイnderに映る刹那。宝石みたいな世界を、かちりと大切に記録する。

フラッシュは、炊かない。

ぶるるろろろろろろ……

わたしのそばを、原付が少し間抜けな排気音を立てて、タラタラと通り過ぎていく。

角刈りが決まったオッチャンがライダーだった。やたらにハマリまくっている、がに股ライドスタイルが印象的過ぎて、ナンバープレートに書かれている番号に至るまで、なぜか無駄に覚えてしまう。

「おっ」

ふと目に入った自動販売機では、「あったか〜い」が、つい先日までは青一色だった陣地に赤い色どりを添えていた。

甘ったるいことで有名な練乳入りコーヒーを見つけて、久しぶりに味わってみたい気分になる。

敢えてまで欲求に逆らう理由も無かった。

がこん。と転がり出てきた缶を取り出すと、当たり前だけど手が暖かくなる。

プルタブを開けて、ちびちびと口に流し込むと、ちよつと頭が痛くなりそうな程の甘さがきくん。と沁みた。

わたしも近所だからと面倒がらずに、原付を車庫から引っ張り出せば良かったかなとちよつと思う。

タラタラ走ったドライブついでにやるコーヒーは、余計に旨く感じられるから。

「うーん。はやいなあ」

ぼーっとしていたら、あつという間に日が沈んでしまった。

必要以上に感傷に浸ってしまった。

それは、きっと今日が日曜日だからだ。

日曜日と月曜日。休日と平日、昼と夜、夏と秋——境界が三つ重なり合って目に見えてしまったから、無性に「今」を特別に思ってしまったんだろう。

そう、ちょうど道端で死にかけてる蟬が、何かの拍子に息を吹き

返すみたいに唐突に、わっとなつて湧いた気持ちを、簡単に抑え込むことは難しい。

空き缶を自販機横に備え付けてあった、げっぶをしそうなくらい腹一杯になつたゴミ箱に捻じり込む。

手が空いて、どうしようもなくなつた私は真上を見上げた。

早くも輝きを取り戻し始めた星々を、指で枠を作つて切り取る。

写真にとる必要は、無いと思つた。

乾いた冷たい風が残暑を掃き去つて行く。

熱いコーヒードで火照つていた体には、余りにも風が沁みた。

「おー。いきなり寒いねえ」

わたしはポケットに手をつ突っ込んで、猫背気味に歩き始めた。こういう仕草のせいで、今となつては貴重となつてしまつた友人に、オッサン臭いを通り越してしばしばジジ臭いと言われているが、性分である。今更女を磨くような歳でもなし、このまま黙つて老いて行きますよーだ。

そして女らしくない趣味筆頭とも言ふべきわが相棒を、カバンに手をつ突っ込んでそつとなでる。

出来るだけ早めに写真は現像しようと思う。

べたつく唇を、舌でなめとる。忘れかけていた甘さが、また舌に広がつた。

今までもきつと誰かがこんな風景を見てきて、きつとこれからも誰かが足を止めて見るであろう。

時代が変わつても変わらないなにかは、移りゆく形ながらも、確かにある。

つい、鼻歌を歌つてしまう。有名な曲。踵を三度こんこんと、と合わせてみたりする。

それが、シャッター代わり。

いつか、今日へ帰りたいと思つた時に帰つてくれるおまじない。

あ、今はちよつとセンチメンタルで乙女っぽいんじゃないかな。

わたくし。

こんななりでも童話くらいは嗜みますよ。

……うん。ゴメン、キヤラの無理です。

星も太陽も、街燈も家から漏れ出る灯りも……。

ヒトがヒトであり続ける限り、おもいとともに時を超えて、ヒトと光は共にある。

それはわたしが朽ち果てて無くなつても、ずっとあり続ける遠い

未来まで。

およそ1世紀近くという若輩ではありますが、そう断言してしま
っていくくらいには年をとったんじゃないかと、わたしは自負し
ています。

そういえばコーヒーで思い出したけれど……

どこかで、喫茶店を営むR型ロボットが居るらしい。

噂が本当なら、私よりずっと「おねえさん」なわけだ。

今度、時間が出来たなら、写真とカメラを持って、行ってみようと思
う。

帰ったら取り合えず、長期休暇中のカブ子ちゃんを冬眠から起こ
して上げなければなるまい。

ボロもいいとこだけど、きつとすぐに機嫌を良くしてくれるはず。

私が世界を観測し始めて、九十九年と364日目。夕方。ヒトが営
む時代もまた黄昏時。

穏やかに時間は流れているけれど……

過ぎ去ってしまった時は、かえらない。

だけどそれでも人は案外、かわらない。

いつまでも未来というやつは真っ白いキャンパスみたいに綺麗で、
果てしない。

だから私は現在という足跡を過去に向かって残すことよって、た
まには右往左往したりもするけど、振り返った時に綺麗な絵になる
よう精一杯一本の線を引くのである。

一了一

ある日曜日のことだった。

お嬢様が体調を崩したとマリアさんに聞いた僕は、一通りの仕事を午前中に片付け、簡単な朝食を作って部屋に赴いた。

9月の空は、太陽の最期の悪あがきを余すことなく地上に伝えるように、雲ひとつ見当たらない。

こんな天気では、夏休みも引きこもりを改めなかった主にはさぞ辛いことだろう。冷房の効いた室内を出て、学校に行ったときに、身体が驚いてバランスを崩してしまったのかもしれない。

寝込んだお嬢様をこれっぽっちも心配していない僕は、のんきに冷房の効いた長い廊下を歩く。

いつものことなのだ。寝不足と運動不足が祟っているのだろう、としか思わなかった。

これを機に、少しは日ごろの生活習慣を改めてくれれば、なんて事を考えていた。

後になって、僕はこの樂觀を悔やんだ。

詮無きことである。

僕にとっても、彼女にとっても。

部屋に入った瞬間、主である三千院ナギが、体調はともかく、精神的に参っているのが僕にはすぐわかった。

まず目に生気がない。こちらを見る目には、幼い彼女が本来持ち合わせるはずのエネルギーが一切感じられなかった。目を開けたまま死んでいるのではないかとさえ思った。

擦り切れた怒りと、涙も枯れ果てる悲哀、そして空虚な義務感。彼女の生を繋いでいるのは、それらへの僅かな反発だけなのではないか。そんなことさえ僕は考える。

しかし、動揺してもいらなかった。

「お嬢様、顔色が悪いですよ？ 朝ご飯をしっかりと食べないから、そんなに元気がなくなるんです。ほら、昼食を持ってきましたから……」

「ハヤテ」

何も言えなくなった。

ゾツとしたのだ。敬愛する、この小さなご主人様の声に。

背筋に氷柱を当てられたように、指先まで一気に温度が下がった。効きすぎた冷房のせいでないことは明らかだ。

こんな声は、今まで聞いたことがなかった。こんな声をさせてはいけなかった。

足音一つでも立てたら、彼女が灰になって崩れ落ちてしまいそうで、僕は動けなくなる。

「そんな顔をするな。昼食を持ってきてくれ。久しぶりにハヤテの料理が食べたい」

久しぶりなんかじゃないですよ。昨日も食べたじゃないですか。言えなかった。

僕を安心させるために作られた、今にも溶けてしまいそうな笑顔。どこか大人びた悲しい主の前に、僕はトレーを差し出した。

彼女の右手に、マジックで1107と書かれていることに、僕はそのとき初めて気が付いた。

「少し話をしよう。座ってくれ」

食事を終えたお嬢様の声色は、少しだけしつかりしたように思う。僕はどうか安心してしようと、全て気のせいだったと自分に暗示をかけようとしていた。

しかしそれは許されなかった。

ナギお嬢様は立て続けに、僕を質問責めにした。

今は西暦何年の何月何日か、僕との出会いはどのようなものか、それからどんなことがあったか、学校の連中はどうなっているのか、愛沢咲夜さんのこと、鷺ノ宮伊澄さんのこと、橘ワタルくんのこと、僕の兄さんのこと、マリアさんのこと、僕は今現在誰かと交際しているのか、など。

異常な光景だった。

それらは全てお嬢様が知っているはずのことで、わざわざ僕に聞くまでもない。

しかしお嬢様はふざけている様子でもなく、静かに僕の応えに耳を傾けている。そして時々感情の読めない目で僕を見つめる。

声を聞くたびに、仕草を観察することに、僕の違和感は強くなっていく。

彼女は元々頭のいい子だった。しかしお世辞にも子供の域から脱しているとは言えない、子供らしい子供だったはずだ。しかしいまのお嬢様からは、年月を重ねることでしか磨かれないはずの、落ち着いた品性が感じられる。

「一体、どうしたんですか。お嬢様」

堪えきれずに、こちらから聞いてみた。

お嬢様の目には諦観があった。悲しみに押し潰された、小さな意思が見えるようだった。

「言われなくても話すとも。先に言っておくが、別に信じてくれなくてもいいからな」

そしてため息をついた。

「まず先に言っておくと、わたしは多分お前が知っている三千院ナギではない。わたしは彷徨っているんだ。色んなわたしの、色んな世界を。いろんな日曜日を」

どんな季節だったのかは、もう思い出せない。暑かったかも寒かったかも。だけど、その日も日曜日だったんだ。だから次の日は月曜日、わたしはどんな理由をつけて学校をサボろうかと、頭を働かせていた。そしてうってつけの理由を思いつき、マリアと一緒に寝た。

そして次の日、いやこの表現は正しいのかな。ともかく私が一度

眠って、起きたとき、また日曜日だった。夢でも見たのかと思ったよ。

「あれ？今日は休みだったか？」と聞いたらこう言われたよ。「そんなに学校に行きたいんですか？」って。

何故かはわからなかったけれど、ともかくその日も休みだった。月曜日が嫌でたまらなくて、悪夢を見たのかとさえ思ったよ。ゲームでもしようかと思ったんだが、眠る前に置いていた場所には全然見当たらず、なら他のゲームにしようとして起動したら、私の記憶とは全然違うセーブデータがそこには入っていた。

誰かが私に無断で進めていたのかと思って、私は怒った。そしてハヤテと一緒に一日中犯人探しをしたんだけど、結局手がかりは何もなし。わたしの勘違いとして片づけられてしまった。

わたしは納得がいなくて、明日こそは必ず犯人を探しだしてやると意気込んで床についた。

目が覚めたら、また日曜日だった。

気のせいかと思っただけれど、これはどう考えてもおかしかった。

目が覚めたとき、わたしはミコノ島の別荘にいたんだ。旅行の最中に、二日連続で日曜日を迎える夢を見るとも思えない。ハヤテが同行する初めての旅行だ。悪夢を見る暇なんてあるはずがない。

眠っている間に、わたしは時間を移動していたんだ。

そう結論付けた。

理屈はまったくわからないけれど、そうしか思えなかった。

まずマリアに、それからハヤテに相談した。夢でも見たんだ、と言

われた。

あの時のお前の、楽しい時間に何を言い出すんだ。とても言いたげな目には、流石の私も堪えたよ。いや、謝らなくていいんだ。当然の反応だよ。

それをわたしは、その後何度も思い知った。

どうすればいいのか思いつかず、ミコノ島での一日もまた過ぎた。

目を覚ましたとき、私は屋敷にいた。

ちよつと安心していただけなのが、我ながら何だかおかしかったよ。解決なんて何も見つかっていないのにな。

そのとき私は15歳だった。

今の私は13歳だったよな？最初にこの現象に巻き込まれたときも、わたしは13歳だった。だから2年分成長した体に全然慣れなくて、ひどく居心地が悪かった。変なものだよ。自分の体なのに。

だけど、一番の衝撃はそんなものじゃなかった。

これはハヤテ。お前に関係あることなんだぞ。なんとマリアと付き合っていたんだ。わたしがそこに来る半年くらい前からな。

これには驚いたよ。私は色々誤解を……、いや、明日からまた、この体の持ち主になるわたしのためにも詳細は省こう。

ともかく、わたしはのけ者にされたような気分でもうにも辛くて、その時間におけるわたしが、これまでどんな風にお前たちと接して

いたのか知りたくなかった。

とはいえ、そんなことには何の意味も無かった。

お前たちのことを知った後、部屋に逃げ込んで、ベッドに倒れ込んだところで眠ってしまったんだ。馬鹿みたいだとおもうだろうけれど、それだけ驚いたんだよ。

逃避癖があつて、自堕落なわたしなら、そんな風に場当たりので愚かな行動をしたって、不思議じゃないだろう？

目が覚めたら、私は今度は16歳だった。1年分歳をとったわたしが最初にやったことは、マリアとの仲は最近どうか、お前に尋ねることだった。

間拔けな自分を責めもしたけれど、そんなことより、とにかく2人には幸せになってほしかったんだ。本当だぞ？

だけど、返ってきた答えはこうだった。

「ええ、まあ悪くは無いと思いますけど、それがどうかしたんですか？」

淡泊なものだと思ったよ。付き合ってから時間が経つとこうなるものなのか、それともとくに破局していたのか、経緯を知らないものだから、思い切つて聞いたんだ。今、付き合っている人はいたんだっけ？ っつて。

そしたらお前はこう言ったんだ。

「えっと、ヒナギクさんとお付き合いし始めて3年目になりますけど……」

そのときが一番驚いた。お前がマリアと付き合い始めたのは、早

くても2年前からだっただけだ。からかわれているかと思つたけど、質問してもお前が嘘を吐いているとは思えなかった。ましてやこんなに堂々と二股をかけることも、ハヤテに限ってあり得ないと思つた。

もしかしたら、と思つたのはその時だ。

それ以上、わたしの事情を誤魔化しきれぬ気がなくなつて、部屋に引きこもつた。

そしてそのまま、またいつの間にか眠っていた。精神的に疲れていたんじゃないかと、今では思うよ。

そして次の日、ハヤテはいなかった。

わたしは14歳になつていて、屋敷の使用人はマリアとクラウドだけ。1年前に出会つたはずのお前のことを、誰も知らなかった。

確信したよ。多元宇宙、平行世界、あり得たかもしれない可能性への収束、そんな言葉を一つくらいは聞いたことがあるだろ？ わたしの漫画で？ ああ、そんなこともあつたな。

ともかく、私が彷徨つていたのは、時間の流れだけじゃなかったんだ。いくつものパラレルワールドを、日曜日というアンカーに流れ着くようにして、わたしは時空を漂流していったんだよ。

……律儀にリアクションを取らなくていい。もう飽き飽きしているんだ。

話を戻すぞ。

平行世界を移動し続けていることに気付いたわたしは、途方に暮れた。それはそうだ。こんなどうしようもない、時間移動だけなら、まだどうにか計算のしようもある。

だが、わたしを取り巻く環境自体が、時間以外のものまでもが変化するのなら、それを知るだけで手一杯だ。

一日ごとにわたし以外の全てが変わり行く状況で、どうやって生きていける？

だけど、どうにもならないと思っただけでも、どうすればいいのか、わたしにはわからなかった。

試しに徹夜してみたが、大体午前2時前後に、記憶が途切れて、気が付いたらまた違う世界にいた。

何度やってみても、わたしはそれに抗えなかった。ゲームなら重大なバグだよな。

それからしばらくは、状況に流されるまま生きていた。

ハヤテがいなかったり、マリアがいなくなっていたり、学校の連中とはあまり会う機会がなかったが、やっぱり微妙にメンバーが違っていったし、顔も見たことがないようなやつと友達になっていたこともあった。漫画を描いていたこともあったし、諦めていた時もあった。

たぶん、同じ状況なんて1つもなかった。

手に数字を書き始めたのもその頃だ。

それだけが、わたしが異邦人であることの証明だったし、そうし

ないと、多分気が狂っていたよ。自分の頭がおかしくなってしまうんだと、信じ込んでしまったと思う。

だけど、その方が楽だったかもしれないな。

どうしても耐え切れなくて、ある日私は自殺を試みた。その窓から身を投げた。

目が覚めたら、相変わらずの平行世界だ。

皮肉というべきかな。その世界では既にジジイがこの世を去っていて、わたしは天涯孤独の身になっていた。

もう、自分の感情がどうあるべきか、わからなかった。

本当にどうしようもないと悟ったのは、その時だ。

それからわたしは、また流され始めた。

今わたしがいるのはな、その途上だ。

いつか終わりが来るとは信じている、信じることしかできない、抜け殻だ。

いつの間にか日は沈んでいた。

電灯のスイッチを入れることもせず、僕はただ座っていた。立ち上がる気力は湧きそうにない。

「今は1107回目。つまりもうすぐ3年だ。3000回目になったら終わるんじゃないかな？」

呆然とする僕に、お嬢様はそう言って笑いかけた。
空っぽの笑顔だった。

見てきたものが、違うのだと思う。

何も言えず、何もしてあげられない。

「すまない。こんなことをいったって、お前は困るよな。大丈夫だよ。ハヤテ」

「わたしのことだ。心配はいらないさ、明日になれば、この体には昨日までの私が戻る。お前は今までどおりにしていればいい。今日ここに流れ着いた私のことは、すぐに忘れる」

勝手なことを。

不覚にもそう思ってしまった。

「怒ってるか？ まあ怒ってるよな。だけどそうせざるを得ないんだよ。綾崎ハヤテ。わたしのことまで気にしていたら、この世界の三千院ナギを守ることなんて、ましてや誰かを幸せにすることなんて、出来やしないんだ。だから忘れるさ。妙な夢を見たようなものだと思ってくれ。そうしてくれたほうが私も助かる」

そういつて、お嬢様はベッドに倒れ込んだ。

「話は終わりだ。夕飯を頼む。マリアがもう作ってくれているかな？ ちゃんと食べておきたいんだ。持ってきてくれないか」

「お嬢様」

「いいから」

取りつく島もない。

今この部屋を出たら、このお嬢様とはもう二度と会えないのでは

ないか。心配する必要は無いと言われても、背を向けるのを躊躇ってしまふ。

それでも結局、僕は台所へ向かった。

部屋に戻ったとき、僕の心配はやはり当たっていた。

すでに眠りについていたお嬢様をマリアさんが起こしたときには、もうあのナギお嬢様はどこにもいなかった。

呆れたようすのマリアさんと、どんな顔をしていいかわからない僕と、寝ぼけたお嬢様。

3人で夕飯を食べた。

皮肉なことだけど、僕はその瞬間をととても幸せだと思った。

私が経験してきたそれぞれの世界。その中に、まったく同じものは1つもなかったはずだ。はずだ、というのは、違いを発見できなかったパターンがいくつかあるからなのだが、そもそもわたしは基本的に引きこもりで、外界との接触を好まなかった。

だから無理やり外に連れ出されるといことはほとんどなくて、部屋の中ですべて忘れたつもりでゲームをやったり、眠くなるまで適当に漫画を読んだりして過ごすことも多かった。

というより、わたしにとってはゲームも漫画も日常なのだ。自分の世界とはまったく違う作品と出くわすことも多く、数多くの日曜日を漂流する、ともすれば単調な毎日では、退屈に殺されないために

は必要な儀式だったと言える。

そんな風に娯楽に夢中になった日には、以前の世界との相違点を発見できないことも、よくあった、

そんなときはふと考えてしまう。

もしかしたらここはわたしがもとにいた世界で、これまでのことはみんな夢だったのではないか？

そんな淡い希望を抱きながら、眠っては絶望した。

さて、時たま忘れていたとはいえ、私も4桁にのぼるさまざまな世界を見てきた。ともなれば、一定のパターンを見つけるくらいは出来る。勿論私の主観で勝手に当てはめたものに過ぎないのだけれど、現状を把握するには役立つ。

そしてこれは、わたしがもつとも嫌いなパターンだった。

「お、目が覚めたか」

薄暗い空間だった。カビと油のにおいが鼻につき、しかしどこからか潮の臭いも漂ってくる。幾人か人間がたむろしているようで、そいつらが動いたり喋ったりするたびに音が反響し、耳障りな事の上なかつた。どうやら閉鎖された広い空間らしい。臭いからしてどこかの埠頭にある倉庫か、工場、あるいはその廃墟。

わたしがそんなところに連れ込まれる理由は、そう多くはないだろう。何不自由なく生きていける三千院ナギが、何らかの理由で落ちぶれたか、ぐれたか、そのどちらかでもなければ。

「おい、誘拐されたのがわかってないのか？ えらく落ち着いてるじゃないか」

こういうことだ。

わたしの周辺には常にSPが警護しているはずだが、まあ危機管理能力に欠けたわたしのことである。大方パーティを抜け出すとか、SPが鬱陶しくて気分を任せて撒こうとしたのだろう。

「誘拐まがいのことをされるのには慣れているからな。それにしても不覚ではあるが」

手足を縛られているわけではなさそうだ。拘束する意味もないということか。つまり目の前の男は、私のことを侮っているし、危害を加える気もないということか。男の傍に佇んでいた女もまた、こちらのことを不思議そうに見つめている。

「へえ、流石にあんな屋敷に住んでいるお嬢様は、住んでいる世界が違うものね。それで？ これから私たちが君にどうして欲しいかわかる？」

「騒ぐな逃げるな暴れるな。ついでに、そんなに落ち着いているなら身代金の要求がスムーズに出来るように協力しろ、というところか」

「物わりのいい子は好きだぞ。で、協力してくれるか？ 俺たちもなるべく乱暴なこととはしたくないんだ」

「ああ、いいぞ。成功するかしないかはお前たち次第だろうが、抵抗しても無意味だろうしな。それで？ 要求する金額はいくらだ？ 1億5千万くらいか？」

2人の顔に驚きが広がった。その不気味な物を見るような目に、わたしは意味もなく傷つく。

わたしを誘拐する手合いには、心当たりがないわけでもない。三
千院家の遺産目当ての親族はその第一候補とも言うべき連中で、ど
の世界に行っても、彼ら彼女らが私に敵意を持っていたことは多々
あった。

が、こいつらがその手先ということは、多分ないだろう。

綾崎ハヤテと桂ヒナギク。

その2人の存在が、何よりの証拠である。

幼少期から、2人とも金に困っていた。

桂先生も同様だろうが、彼女がここにいるのかはわからない。

優等生だったヒナギクだけが道を踏み外したということだって、
十分にありうるのだ。

身代金目当ての犯行だということを、私は最初から半ば確信して
いた。

何度も似たような光景に出くわしたとはいえ、そんな風に決めつ
けてしまう自分が、なんだかたまらなく嫌になった。

わかっていたことだが、わたしの知るハヤテ、ヒナギクと、目の前
にいる2人はまったく違う人生を歩んできた別人だった。

親の愛情を知らず、貧困にあえぎながら、それでもハヤテは自力
で、ヒナギクは姉に助けられながら生きてきた。

そして2人が出会ったとき、なんとヒナギクはハヤテに恋をした。
その際の状況は詳しく話してくれなかったが、ヒナギクからすれ
ば相当に運命的な出会いだったに違いない。何しろ彼女はその日か

ら姉の元を離れ、1人暮らしのハヤテのねぐらに転がり込んだとい
うのだ。

境遇は変われど、こいつの天然ジゴロは変わらないらしい。これ
を体質と呼ぶべきか、因果と呼ぶべきか、少々言葉の選択に困る。

ともあれ、ハヤテはヒナギクを受け入れた。それなりに幸せな日々
を送っていたが、すでに失踪していた親の借金が膨れ上がり、1億
5千万もの額に達していたことを、2人は闇金融業者の来訪で知る。

そしてなんとか逃げおおせた2人は

「これはもう、2人で現代のボニーとクライドになるしかないと思
つてさ。情報通の友人を当てにして、夜の公園で1人むくれてた君
を誘拐したんだ」

「彼らは情報を、私たちは実行力を、それぞれ提供した結果つてわ
け。交渉の専門家もいるし、きつとこれなら上手くいくわよ。ヤクザ
相手に手切れ金を用意して、警察の目を盗んで全国各地を回るの。
どうにかして海外に逃げられたらなお良いわね」

先ほども言ったとおり、2人ともわたしの知る紳士でも、完璧超
人でもない。

こいつらの言動にせよ計画にせよ、余りにも馬鹿馬鹿しい。涙が
出そうだ。

そんなに人員を集めたら、自分たちの取り分などたかが知れてい
るだろうに、それでヤクザと手が切れる気である。ヤクザから逃げ
切るよりも警察から逃げる方がずっと難しいし、ついでに言えばボ
ニーとクライドは強盗を繰り返した筋金入りのワルで、最終的には

2人揃って警察にハチの巢にされて死ぬ。縁起が悪いにもほどがある。

ハヤテもヒナギクも、苦勞からくる勤勉さで、優秀な人間足らんとしていた人物である。それが軌道をそれると、ここまで落ちぶれるものなのだろうか。

いや、実際そうなのだろう。

一歩間違えれば、わたしを助けてくれるヒーローなど存在しなかった。わたしが生きてきた世界のハヤテは、比喩でもなんでもなく奇跡の産物だ。不幸の末に消え去るか、敵を見つけて道を踏み外すほかに、生きる道がなかった可能性だってあるのだ。

ヒナギクはまあ、姉があんなだしな。うん、こいつに関しては深く考えないようにしよう。恋多き乙女なのは、いつだって変わらないわけだし。

今、2人は私を無視して、耳に入れたら脳が腐り落ちてしまいそうな愛の言葉をささやき合っている。

もう一度眠ってしまおうかと思った。

しかし、面倒だからと言って割り切ってしまうのが、今のわたしの心境である。

結局要求を全て呑み、金額を少し多めに2億ほど用意させて、わたしは誘拐犯ともども別れた。

この世界の2人が、幸せになってくれることを祈った。

そろそろこの生活も、2000日目を迎えようとしている。日という単位が事実在即しているかと言えば微妙なところだが、まあ仕方があるまい。

気が付いた一つの事実として、彼がわたしに惚れる世界は存在しないというのがある。

2000近く世界を回ってにおいてこの有様。かつてわたしが陥っていた勘違いが実現する確率は、どうやら2000分の1以下のようだ。

流れ着いた場所で私が何をしようと、この私自身にとっては1日経てば何の関わりもなくなる。ならば1度くらい、あいつを地獄の苦しみの果てに、亡き者にしてみてはどうだろうか。

実を言うと、何度か試そうとしたことがある。この生活が100日を超えた頃だっただろうか。その頃のわたしは、ひとりで空回っていたころの自分が恥ずかしくて、とにかく何か八つ当たりしてないと気が済まなかった。

結局、実行はしていない。

大切な人を傷つけてしまえば、わたしはその瞬間から真正銘の怪物になってしまうのだろう。あとは気が狂うまで何度も何度も、わたしはあいつを陥れるだろう。彼女を傷つけるだろう。誰彼かまわず不幸にしてしまうはずだ。それだけはごめんだった。わたしは人間であり続ける。そうしなければならぬ。

“メモにはそう書いてあった”

正確に言えば、それは漫画のプロットだ。

今のわたしと、まったく同じ状況に陥った主人公が、長い長い苦悶に満ちた旅を続ける話。2000回目を前にして、消耗しきった主人公が、静かな煩悶を抱えている。

どうということだ？

先ほど手の甲に1873と書いたばかりだ。

机の上に放置されていたプロットと、描きかけの漫画に目を通したところで、わたしは衝撃に襲われた。明らかにおかしい。それとも、これもまた平行世界の可能性の一つとして片づけられるものなのだろうか。

いや、確かにこれまでわたしが見てきた世界はどれもこれも、よく言えばバリエーションに富んだ、悪く言えばまったくもって経緯が想像できない、恐ろしく無秩序なものばかりだったが、これは流石に符号が合致しすぎている。

漫画のほうは、良くも悪くもわたしの漫画だ。支離滅裂でアイデアばかりが暴走していて、なんとも気恥ずかしい。

だが、プロットは別だ。もはや詩である。わたしが、漫画を描くとき、こんなものはめったに描かない。そもそも、こんなフアジーな代物に頼って漫画を描くやり方を私は不合理だと切り捨てていたはずだ。

世界が変われど、私自身の性根や習慣はそう変わらない。もしくは

は、この私自身と似通った私のところに、精神が流れ着くのだろうか。いずれにせよ、これまでとは違う。

この“わたし”は明らかに何かに影響されている。

では、その影響元は？

私ではないのか？

つまり、この不毛な漂流が続くほど、他の三千院ナギに影響を与え続けるということではないのか？ たとえば、夢の中では平行世界の出来事を体験することが出来る。というオカルトの話題を、以前目にしたことがある。わたしの意識が、無限に広がる平行世界のわたしたちと感応を起こしているとしたら？ 私の精神が摩耗するとき、他のわたしが影響を受けてしまうとしたら？ どうなる？ 最悪の場合、すべての三千院ナギが廃人と化してしまうのではないか？ だとしたら……。

「落ち着け」

暴走しかけた想像の翼を、ひとまず畳む。

単なる憶測だ。悪い方向に考えを広げても、それを解消するため証明が不可能な以上、意味はない。どうしようもないのだ。

そうだ。わたしはどうしようもないから、こんな風に流されているんじゃないか。他の何者にも頓着せずに、ただただ無責任でいられる。だからこそ、まだかろうじて正気を保っていられる。孤独を友達だと思う。

だが、もしこんなわたしが、いやおうなしに誰かと影響を与え合う存在であるとしたら、最悪だ。そこには責任が生まれる。

わたしの分まで幸せになつてほしいと願つた、無限に近い数のわたし。そのすべてに対して、わたしは責任を持つてしまふ。それだけは駄目だ。そんなことになつたらわたしの心は幾ばくも持つまい。

ただ1つの、いつかは溶けてしまふ流水であること。それだけでいい。それだけが、わたしの存在意義であつてくれれば、苦しむことなどないのだ。

強くなろう。

これは試練だ。

「負けないぞ」

呟いた声が、少しだけ私を強くしてくれる。

屈するならばそれは敗北だ。負けてなどいられない。そうだ、わたしは子供で、身の程知らずの世間知らずで、人に頼つてばかりだった。

だけど、そんなちっぽけなわたしでも、負けるのだけは我慢ならない。子供の癩癩みたいにみつともない意地だとしても、それを捨ててなどやらない。

「狂つてなど、やるものか」

わたしが強ければ、それでいいのだ。何万回だつて、何億回だつて耐えてやろうではないか。もしも、わたしが影響を与え続けるというのなら、わたしが強くなれば、すべての三千院ナギは強くあれる。

空元気であることは自分でもわかつていた。

ただ、わたしにはもう、そうする以外になつたのだ。

「頑張つたね」

そんな言葉をかけてもらったのは、一体いつ振りだつただろうか。

目が覚めたとき、わたしは誰かの腕の中にあつた。その顔を見た瞬間の驚きときたらなかつた。驚きすぎて、手の甲に書くべき数字を忘れてしまつたくらいだ。5600回を超えたあたりだつたと思うのだが、欠かさず続けてきた習慣を忘れてしまうほど、その人物の正体は衝撃的だった。

微笑みかけられても、抱きしめられても、その甘い香りを嗅いでも、どうしても信じられなくて、わたしは声に出して呼んだ。

「母よ……」

「なあに？」

「……苦しい」

苦笑して、母は、三千院紫子は、私から離れた。

どこかで見たことのある部屋だった。ここは多分、昔の母の部屋だ。片付けの出来ない母の居場所はいつも散らかつていて、わたしは不思議と、その雑多な空間に落ち着きを覚えていた。

私の体は、今は4歳といったところだろうか。ここまで昔に戻つたことは、今までなかつた。もちろんこんな風に母の顔を見るのも、こんな生活になつてから初めてのことだ。

私の主観においては、一体何年ぶりに会うのだろうか。もはや顔も忘れかけていた。

せつかく会つたのだから、話したいことがあるはずだった。だけ

ど、いくらなんでも突然すぎる。言葉が喉から出てこない。

その代わり、わたしは涙を流していた。

懐かしいからか、それとも、一瞬でも考えてしまったからだろうか。このままこの世界にいることが出来れば、と。

もう一度、わたしは母に引き寄せられた。この胸に飛び込むのもいつ振りなのだろう。

「頑張ったね。ナギちゃん」

「がんばってなんて、ない」

聞きたくない。だけど耳をふさげない。

わたしではない三千院ナギの話など、母の口から聞きたくはない。だけど、その声を聞いていたい。嫌だ、こんな矛盾した考えは、強くあるべき私に相応しくない。

しかし、困惑するわたしの耳元で、母は信じられないことを呟いた。

「大丈夫、ゆっきゅんにはね、ぜんぶわかってるんだから」

「え？」

「あなたがどこから来たナギちゃんなのかは知らないけれど、お母さんに任せて。もう旅をする必要はないんだから。今、クラウドに伝言を頼むから、少しだけ待っててね」

それは、どういうことだ？

「それは、それは、どういう」

わたし自身の幼い声に影響でもされたのか、言葉が上手く出てこない。

母は何かを知っている？　なあ、これは願望なのか？　それとも、情けない勘違いか？

もしかしたら、わたしを助けてくれるんじゃないか、って。

私はその瞬間、驚くべきことに、希望を持ってしまったのだ。

それから3時間ほど経っただろうか。

わたしは、得体のしれない魔法陣のような模様の上に寝かされていた。これは確か五芒星といっただろうか、横になったわたしの背丈より、直径が少し大きい。そこまで大きなものではないのだが、外周の淵には母と、伊澄の曾婆ちゃん、鷺ノ宮銀華が立っているの、なんともいえない圧迫感を感じる。本当に小さな体なのだ。この頃の私は。

「わたしはこれから、生贄に捧げられでもするのか？」

「そんな心配はしなくてもいいのよ」

「といっても母よ。さっきから何も教えてくれないではないか。聞

きたいことは山ほどあるのに、全部聞き流して」

「説明したってわからんということだ。ちよつとそのまま動くな」

銀華婆さんは、手元の鎖を五芒星の各頂点に突き刺して、そのまま目を瞑る。

母はしゃがみこみ、わたしの手を取って握った。

暖かい手だった。だからこそ、このままでいいのか、と思う。

「わたしは、あなたたちが知っている三千院ナギではないんだぞ。

なにやら全てわかったような顔をしているが、そのあたり、本当にわかってるのか？」

「知ってるわよ。わたしがであった、大人びたナギちゃんは、あなたが初めてじゃないもの」

「……は？」

ちよつと待て、それは。

「あなただけじゃないのよ。最初は漫画かにかの影響かなと思っただけ、1日だけ、ナギちゃんの性格が、人が変わったように大人っぽくなるのを、わたしはこれまで3回見たの。何も言わなくても、子供の様子なんて親はすぐわかるんだから、あなたの変化に気が付いたのも、当たり前なのよ」

頭が追いつかない。

わたし以外にも、平行世界を彷徨う三千院ナギがいた？

思い出したのは、わたしのことを的確にとらえた漫画のプロットのことだ。

もしあれが、わたしが及ぼした影響ではなく、他の、あの世界に流れていったわたし自身が書いたものだとしたら。

だが、全てのわたしが世界を漂流しているはずはない。もしそんなことになっていけば、あちこちで見かけたわたしの生活はもつとめちやくちやになっていくはずだ。では、平穩無事に生きている三千院ナギと、わたしのように不幸に巻き込まれた三千院ナギの違いは何だ？

最近、考え込むことが増してしまった。

昔のわたしは、もつとお気楽で墮落していたのに、そんな風には、もう生きられそうにない。

「考えても仕方がないなら、考える必要なんてないのよ」

母はわたしのむかしの記憶とはかけ離れてどうもしっかりしている。こんな風に諭されることなど、今まであっただろうか。

「それで、私の方にも話が回ってきたというわけじゃ。かわいい孫の頼みでもあるからこうして協力してやっとなるが、実を言えばこれからどうなるかは未知数だな。お前も祈っとれ。上手くいけば、お前さんはこの世界に固定される」

「さっきも言ったがな、わたしはあなたたちがしている三千院ナギではない。元々ここにいた、幼い私の居場所を、奪ってしまったといとおもうのか？」

「あなたも、わたしの子供であることには変わりはないわよ」

「だ、そうじゃ」

……この、なんとなく人を納得させてしまう妙な説得力は、確かに母らしい。

「それにね。ナギちゃんを起点にして、他のナギちゃんもみんな助けられるかもしれないのよ。仕組みは秘密だけどね」

このお気楽な様子を見てみると、反論する気もなくなってしまう。たぶん、むかしからそうだった。

「……いいよ。わかった。鷲ノ宮家はもちろん、母が変な力を受け取ったのも、一応知ってはいるんだ。どうとでもしてくれ」

もちろん強がりである。

私の胸は希望に押しつぶされそうだったし、出来る事なら、当たり前のことだけれど、助けて欲しかった。

だけど、こんなにも話がとんとん拍子に進むのは、それはそれで不安で。

それに、あんまり期待をしすぎるのもよくない。

もしも失敗したら、無理だったなら、その瞬間に覚える失望が、私の心を殺してしまうかもしれない。

あくまでお気楽に、鷺ノ宮銀華は鎖に霊力を込める。

めまいがするほど自然に、母が私の手を握る。

そして、わたしの視界は光に包まれた。

水面に漂う、おびただしい数の粒を思い浮かべていたきたい。

それは、一見すれば単なる気泡だ。洗剤をこぼした台所のシンクみたいに、泡立っているようにしか見えない。

では、泡の中には何があるだろう？ もちろん空気だ。小さな気泡だろうとシャボン玉だろうと、中にはありふれた空気が入っている。どこにでもあるものだ、

では空気ではなかったとしたら。ありふれたものではなかったとしたら。

私の目の前にあるのは、気泡とシャボン玉に似た、ある種の禁忌だ。

量子コンピュータがはじき出した、重なり合っている可能性。

いくつもの、平行世界。鷹の目から俯瞰して見つめる、時空の概略図である。

「見るものが見れば壮大な光景なのだろうが、随分やつつけの映像だな」

「ほとんどのパワーは計算に使ってますからね、見栄えは勘弁してくださいよ」

軽口をたたく研究者の声には、内容とは裏腹に、感動の色があった。

確かに、長年の研究成果が目の前にあるとなれば、感動もするだろう。出資者として立ち会ったわたしの胸にも、深い感慨があった。

が、それはこの男とは全くの別物だ。

卵が先か鶏が先か。

わたしが時空を漂流することになった原因が作られる瞬間に、漂流した先の世界で、立ち会う。

パラドクスという言葉は、原因と結果を見通せない現状においては、使うこともおこがましい。けれど、わたしとしては、せめてこれを皮肉と呼びたい。

「ナギさん、どうします？ これから実験シークエンス進めますけど、何かしたいことかありますか？ 一応検証の途中ではあるんですけど、ここまでご協力いただいたんですから、何か恩返しになるようなことがしたいんです」

ほら、きた。おあつらえ向きのセリフだ。

「そうだな」

もったいぶって、わたしは答える。

「この中から日曜日を選び出して、観察できないかな？ 正確には、日曜日という概念がある世界を、か」

「へえ、それはまた、どうしてです？」

「いや、日曜日が終わらないことを、どこの世界でも祈っているものなのかな、と違ってな。だってみんな嫌だろ？ 月曜日」

存外、受けは良かった。

「いいですね。それじゃあ観測してみますか。日曜日」

「ああ、面白そうだろ？ もしかしたら、我々が観測することによって、内部の知的生命体の意思が共鳴を起こして、変化が起きるかもしれないぞ」

まっさかあー。

先ほどの研究者だけでなく、その場にいた者の殆どが笑った。

確かにな。それじゃあ下手なSFだ。だけどそれが正解なんだよ。興に乗ったのか、彼らは和やかに操作を始める。

わたしはそれを横目に、もはや習慣のように、忌まわしい手の甲へと視線を向けた。

548948

きつと、わたしは狂ってしまったのだと思う。

さて、それではこれから、何をしよう？

綾崎ハヤテは、自分を幸せ者だと思う。

不幸のどん底だった自分を受け入れてくれた三千院家。そこで執事として働いている現状は、誇らしく、嬉しい。

おっとりして掴みどころがないけれど、話していてとても楽しい奥様。

とても綺麗で優しいメイドさん。

少し怠け者の気があるけれど、とても博識でしっかりした考えを持っている金髪ツインテールの天才お嬢様。

あとはまあ、頼りにならなくても先輩の執事長とか、虎とか。

ともかく、かつての自分と比べて、なんと充実した毎日であることか。

最近では、お嬢様と同じ学校へ通うように勧められて、編入試験にも合格。失ったはずの学生生活さえ手に入れた。クラスメイトも、

変な人もいるけれど、愉快な人たちばかりだ。こんなに幸せで良いんだらうか。そう思うとともに、より一層頑張らなければ、と気を引き締める毎日である。

それにしても、自分とはかくとして、結構なぐうたらであるはずのお嬢様も、なぜか月曜日は楽しそうだった。やたらとテンションが高い。にしては、日曜日はどこか不安そうにしている。

ハヤテはそのあたりを不思議に思っているが、本人に聞いてもあまりまいな答えが返ってくるばかりである。

まあ、考えても詮無きことである。いずれにせよ、彼女は健康に毎

日を送っているし、執事である自分からすれば、喜びこそすれ不安に思うことはあるまい。

その日もまた、いつもと変わらぬ日曜日だった。

日曜日に限って早起きの三千院ナギは、時々早朝から屋敷の中を歩き回っていることがある。体を起こすために散歩をする、というのが本人の弁。

そしてそれを探すのも、ハヤテの習慣となっている。

その日、彼女は奥様の、三千院紫子様の寝室にいた。

まだ眠いのか、お嬢様はどこか不機嫌そうで、いつもとは雰囲気
が違っているように見えた。

どうも、ハヤテの存在にはまだ気づいていないらしい。

彼女は自分の母親を見て、搾り出すように呟いた。

「やっと見つけた」

何故だろうか。

綾崎ハヤテはその瞬間、彼女が別の人間であるかのような、錯覚を覚えた。

鎮守府の日常

著者…霞煌

イラスト…充電池

ぐんぐん

吹雪「暑いよー」ぐんぐん

夕立「暑いっぼいー」ぐんぐん

睦月「今日は暑いねー」んんん

吹雪「暑すぎて溶けちゃいそうだよお」

夕立「海水浴がしたいっぼいー」

睦月「最近深海棲艦との戦いもないし平和だからね、何かイベントがあってもいいと思うんだけどなあ」

夕立「だから皆で海水浴をすればいいっぼいー」

吹雪「でも私最近太っちゃったから水着着るのに少し抵抗が……」

夕立「吹雪ちゃんスタイルいいし大丈夫っぼい」

吹雪「うーん、私よりもずっとスタイルの良い夕立ちゃんに言われなくてもなあ」

睦月「水着と言えば噂で聞いたんだけど一航戦の二人って水着じゃなくて禪らしいよ」

夕立「あーなんとなくわかるっぼい」

吹雪「赤城さんの禪姿……カッコイイ……」ぎんぎん

睦月「吹雪ちゃんが自分の世界に行っちゃったね」

夕立「暑さにやられたっぼい」

んんん

長門『緊急連絡、至急全艦娘は広場に集合せよ』

吹雪 「ん？長門さんだ、どうしたんだろう？」

夕立 「何か大事な連絡っぽい」

睦月 「もしかしたら深海棲艦がきたのかもしれないよ、急がなきゃ！」

キョロ

長門 「そこで提督の計らいもあり今日は全ての業務を止めて全員でスイカを消費することとする！」

長門 「これよりスイカ消費作戦を開始する！」

↓広場↓

キョロ

長門 「全員集まったな」

吹雪 「やったー！」ピュンピュン

陸奥 「そうみたいね」

夕立 「スイカパーティーっぽい！」

吹雪 「何かあったんですか長門さん？」

睦月 「スイカ美味しそうだねー」

長門 「ああ、今話す」

吹雪 「司令官ありがとー！」

長門 「たった今提督の実家から大量のスイカが送られてきた！」

赤城 「加賀さん、これは夢でしょうか」ギザギザ

長門 「皆も知ってる通り最近暑い、だからこのスイカをできるだけ早く消費しなければならぬ」

加賀 「いいえ、現実よ赤城さん」ギザギザ

飛龍「あー二人にスイッチ入っちゃったよ」

―食事処間宮―

蒼龍「赤城さん、加賀さん、よだれよだれ！」

瑞鶴「偶にはこういうのもいいかもね翔鶴姉」

吹雪「美味しいー」ニギニギヤ

翔鶴「そうね」ㄥ

睦月「甘くて美味しいねー」ㄣ

暁「す、スイカって何かしら？」カキカ

吹雪「夕立ちちゃん、そんなに一気に食べたら……」

響「赤城さんの反応からするに食べ物みたいだね」

夕立「頭が……頭が割れるように痛いっばい」ヤキ

雷「聞いたことあるわ！確か大きな丸い食べ物よ！」

吹雪「だから言ったのに」ㄥ

電「確か司令官さんは野菜だって言っていたのです」

睦月「夏だねえ」ㄥ

暁「野菜」ㄣ

睦月「……あれ？」

吹雪「どうしたの吹雪ちゃん？」

長門「とにかく皆今日はゆっくり休め、解散！」

睦月「ここにあったもう一つのスイカがなくなってるの」

吹雪 「きつと誰かが取って食べたんじゃない？」

睦月 「でも近くに誰もいなかったような……」

吹雪 「間宮さんに言えばまた貰えるって」

睦月 「それもそうだね、後でまたもらいにいこーっと」

如月 (幽霊) 「♪」



瑞鶴 「加賀、勝負よ！」

加賀 「急に何を言い出すかと思えばくだらない、私はそんなことしないわ」

瑞鶴 「あら、逃げるのかしら？」

加賀 「」

瑞鶴 「天下の一航戦も大したことないわねー」

加賀 「私に勝負を仕掛けたことを後悔させてあげるわ」

瑞鶴 「望むところよ、私の方が上だってわからせてあげる」

翔鶴 「こら瑞鶴、また加賀さんにちよつかいだして」

赤城 「それより翔鶴さん、スイカのおかわり持ってきてもらってもいいですか？」

翔鶴 「ええ……って赤城さんもうこんなに食べたんですか!？」



飛龍 「扇風機っていいね、そーりゅー」

蒼龍 「そうだねひりゅー」

飛龍 「扇風機は人類最高の発明だよー」

蒼龍 「本当にねー」

飛龍 「ほら、こうすれば胸も蒸れないし涼しいよー」

蒼龍 「わーほんとだー。いつも暑くて胸が蒸れちゃうもんねー」

大鳳 「ぎゅー」

大鳳 「(胸が……蒸れる……)」ぎゅー」

愛宕 「あら、どうしたの大鳳ちゃん？」

大鳳 「い、いえなんでもありません」

高雄 「何もない顔ではありませんよ？何か悩みがあるなら相談してくださいさってもいいんですよ？」

大鳳 「いえ……もう少し大きい方が良かったなと(胸が)」

高雄 「そういえば確かに大鳳さんのだけ少し小さいかもしれませんねえ(スイカが)」

愛宕 「それもそうね〜（スイカが）」

大鳳 「どうすれば……いいんでしょうか」

愛宕 「そんな顔しなくても大丈夫よ〜」

大鳳 「え？」

愛宕 「簡単な話よ〜小さいなら取り換えればいいじゃない」

高雄 「それもそうね」

大鳳 「取り換えることができるんですか？」

愛宕 「当たり前よ〜なんだったら私のをあげるわ〜」

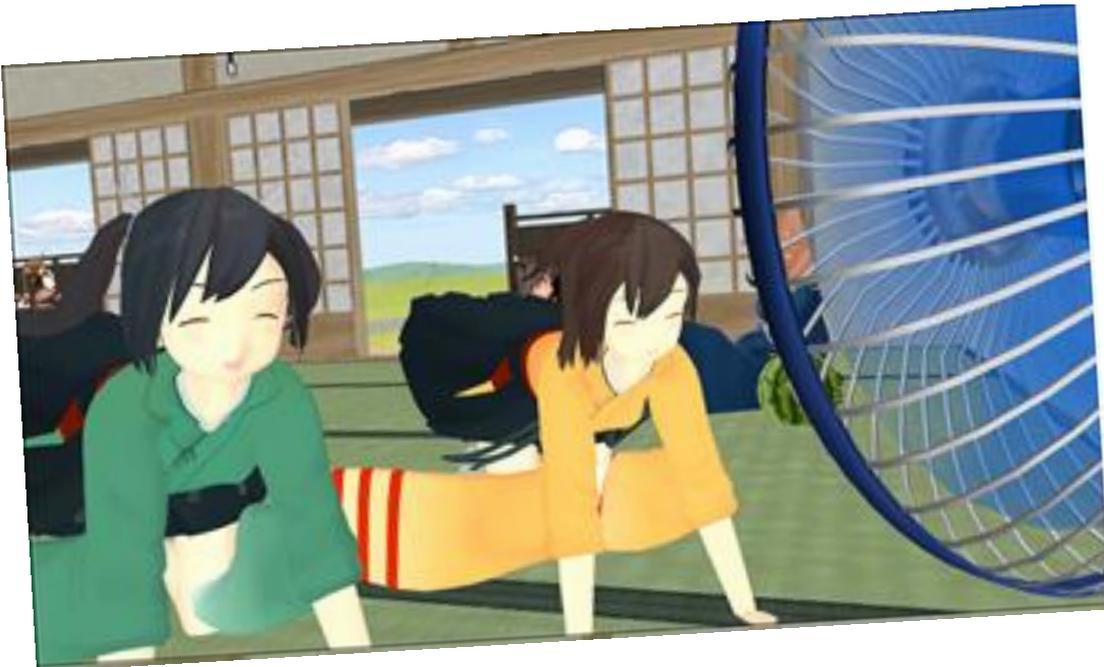
大鳳 「ええ… 本当にいいんですか？」

高雄 「私のもあげるわ」

大鳳 「そんなに貰ったら私壊れちゃいますよ!？」

高雄 「大丈夫よ、大きすぎたら切ればいいですしね」

大鳳 「切れるんですか？」



大淀 「金剛さん、スイカを食べてください」

金剛 「紅茶にスイカは合わないネー」

榛名 「でも金剛お姉様、スイカは美味しいですよ？」

比叡 「そうですよお姉様、スイカと紅茶も合うと思いますよ！」

金剛 「そもそもスイカはそこまで好きじゃないネー」

大淀 「でもスイカが沢山余ってるんです、食べてください」

金剛 「ティータイムが終わったら考えるネー」

大淀 「もう……」

比叡 「お姉様が……スイカ嫌い……」

霧島 「ヒッ」

比叡 「そんなんじゃない駄目……でもどうすれば……」

霧島 「！」

霧島 「(金剛お姉様、榛名、大変よ)」クソクソ

榛名 「(霧島が緊急アイコンタクトを使うなんてただ事じゃないようですね)」

金剛 「(どうしまシタ?)」

霧島 「(先ほどの金剛お姉様の発言で比叡お姉様がまた暴走しそうです)」

金剛 「(それくらいなら大丈夫ネーなんとかなるでショー)」

榛名 「(榛名は大丈夫です)」

霧島 「(いえ、霧島の計算によるとこの後比叡お姉様がスイカカレーを作る確率が99%です)」

金剛 「(!)」

榛名 「(!)」

霧島 「(調理の仕方によっては美味しいのかもしれませんが比叡お姉

様の事です、きつと物凄いカレーができあがるでしょう)」

金剛「それはまずいネー」^{キウキウ}

榛名「(榛名は大丈……やっぱり無理です)」^{キウキウ}

霧島「(ならスイカを食べるしかありませんね)」

金剛「(わかったネー)」

榛名「(きつと紅茶とも合いますよ)」

大淀「では後でちゃんと食べてくださいね」^{キウキウ}

比叡「……そうだ！」

比叡「お姉様！スイカが嫌いならこの比叡がスイカカレーを」

金剛「ちよつと待つネー」^{キウキウ}

大淀「なんですか？」

金剛「やっぱりスイカ食べるネー」^{キウキウ}

大淀「いいですけどどうしたんですか急に？」

金剛「(じ、実はスイカ好きだったネー)」^{ダウダウ}

大淀「はあ」

榛名「(そ、そうなんです。金剛お姉様は実はスイカが大好きなんです)」^{ダウダウ}

霧島「え、ええ」^{ダウダウ}

大淀「(そうですか、じゃあこれは置いときますね。では)」^{キウキウ}

比叡「(金剛お姉様ってスイカ好きだったんですね！比叡は勘違いしてました！)」

金剛「イエース。だからヒエー私は大丈」

比叡「(じゃあ後でお姉様の為にスイカカレーを作りますね！)」

金剛「」

榛名 〇
霧島 〇



瑞鶴「ふふふ……どうしたのかしら加賀、身体だけじゃなく顔まで青くなってるじゃない……」ツレツレ

暁「瑞鶴さんも顔青いわよ」

加賀「甘いわねスイカく、私はまだまだ余裕よ」ツレ

雷「私は瑞鶴さんじゃないわ」

響「まだまだスイカはあるんだ、存分に競うといいさ」ツレ

加賀瑞鶴「……」

瑞鶴「」

翔鶴「瑞鶴？急に固まってどうしたの？瑞鶴？瑞鶴？」ネネネ

加賀「今回も私の勝ちのようね、スイカく」

雷「だから私は雷よ加賀さん」

暁「どっちの勝ちとも言い難いわね」

響「ハラショー」

間宮「楽しそうねえ」

赤城「いやースイカは美味しいですねー」

電「もう赤城さん一人でいいんじゃないでしょうか……」



那珂「じゃーん！冷たいスイカを食べられるように網に入れて池の中で冷やしたよー！」

川内「おー流石那珂、できる子だねー」

神通「美味しそうねえ」

那珂「那珂ちゃんクラスのアイドルになるとねーいつ写真を撮られるかわからないから常に気を張らないといけないんだよー」

川内「へーそうなんだ」

神通「そうなの」

那珂「そうそう、だからスイカを取り出すときもこう美しく」

那珂「あ」

キン。ン。

川内「なんだ？自分から池に突っ込んでいったぞ？」

神通「これもアイドルに必要なことなのかしら」

島風「連装砲ちゃん、スイカ食べるー？」

連装砲「」コココ

夕張「(連装砲ちゃんってスイカ食べれるのかしら……?)」

利根「筑摩くわしはまだまだ食べれるぞくもう一つ持ってきていーく
クーマー

筑摩「はいはい」ヒロヒロ

球磨「食べたら眠くなってきたクーマー」メキメキ

多摩「お昼寝はやっぱり屋根の上に限るニヤ」メキメキ



大和「偶にはこういうのもいいものですね」

長門「まあ最近皆頑張っていたからな、今日だけ特別だ」

陸奥「あらあら、素直じゃないんだから」

長門「しかし思ったより量が多いな。これは私達も本気で食べなければならんな」

大和「任せてください、食べるのは得意ですから」

陸奥「私も手伝うわ」

長門「うむ、では全力で処理してまた明日から頑張るか！」

終わり



あとがき

【双剣士さん】

いやまあ、いろいろすみません。

【瑞穂さん】

こんにちは、瑞穂です。いつもお世話になっております。

有志合同本2016「日曜日の出来事」刊行おめでとうございます。

3度目の合同本参加になりますが、かねてより有志の合同本に参加したかったので投稿させていただきました。

今回のSSは、職場において実際にあった出来事をもとに執筆しました。休憩時間中に同僚のひとりが突然、早口言葉を言い出し、またところ、私を含めてその場にいた皆さんが乗せられて楽しみましたので、このネタをもとにすれば面白いSSになるかも、ということ
で喫茶どんぐりを舞台としたSSを構想・執筆しました。

そして言葉遊びをするなかで友情・絆が深まるSSを書き上げたつもりですから、雰囲気として皆さんに受け入れていただければ幸いです。ただ、地の文の語り口調が少々固くなってしまったことと、登場人物は私が好きなキャラクターばかりなので、そのあたりはご了承ください（本音を言うとアーたんを登場させたかった）。

まあ、歩さんを主人公にすると冒頭で書いておきながら主人公らしくない点、これまでとは異なるジャンルのSSなので上手く書けたかどうかという点は不安が残りますが。

それでは最後に、今回の有志合同本を主催してくださいました明日の明後日さん、他にも参加してくださいました著者の方々、そして拙作を読んでいたいただいた読者の皆さんに感謝いたします。どうもありがとうございます。

瑞穂でした。

【ピーすけさん】

ええ。今回もですとも。やりたい放題やりましたとも。

何も考えてなさそうにみえてその実何も考えてないのですよ。私は。

イラスト3枚含めてトータル5作品。出来はさておき突っ走りました。

今回もいろいろバク……もといパロディ、ないしオマージュしました。

ヨコハマ買い出し紀行ですよ。シンフォギアですよ。そしてなによりガンⅡカタですよ。

やりたいこと突っ込んだだけ。B級でしかないと言われれば的を射すぎていてぐうの音も出ません。

代わりにSF要素少なかったから差し引きゼロに……なりませんか。なりませんよねー。

P.S

戦闘妖精雪風を読み、serial experiments lain を視聴した衝撃を、布袋劇並の個性的な殺陣を取り入れつつ、ガルパン並みのエンターテイメント性を持たせて文章化してみたいんですが、誰かいいアイデア持ってませんか？

あ、もちろんガンⅡカタは必須で。

【雪月さん】

この作品は、東京都美術館で行われていた「伊藤若冲展」での自分の実体験を元に描いた作品です。

2016年4月22日〜5月24日に開催された「生誕300年記念 若冲展」ですが、伊藤若冲という人物の話題性と、開催期間約1ヶ月という短さのために連日の超満員となりました。

自分も2度ほど近くに立ち寄ったのですが、それはもうすさまじい大行列。

大体午後2時ぐらいにそこに着いたのですが、立て看板には「160分待ち」と言う文字が(東京都美術館は5時閉館です)。並んだとしても20分しか観覧できないんですけど？

これはもう早くに行かないと駄目だと思い、三度目の正直ということで世間的には平日であった休日の午前中に上野へ行ったのですが、それでも大行列が！

美術館前についたのが9時20分(開館は9時30分だったのですが、最終的にチケットを切ってもらえたのが13時20分という。待つこと自体は別に苦にしない性格なのですが、それでもこれは大変でした。後で知ったことですが先頭の方は午後4時頃から並んでいたそうですよ。流石にそれは寝ていたい時間です。

「企画展見に行くの3回目」に関しては、自分の隣の方がそう言ったわけでは無いのですが、自分より少し前に並んでいる方が「この間もこれだけ並んだんですよ」というのを小耳に挟んだ次第です。

一回見てるのなら一度も見えていない人に譲ってくれませんかねえ。と思ったのですが、まあお金を払えば皆平等ですしね。ただ企画展自体は凄く楽しかったです。4時間待ちなんて大したことありませんね。うん。

作中の登場人物ですが、一言で言うのと静と動のコンビとでも言いましょうか、インドア派とアウトドア派。行動派と静観派。とにかく、一見すると性格の合わないような仲の良い二人組。と言う形です。

ぶっちゃけてしまうと、それ以外何も決まっていなかったため、性別も年齢も全て謎のままです。せいぜい分かるのは先輩と後輩と言うことですが、学校の先輩なのか会社の先輩なのか、はたまた別のものなのか、本当に謎です。

まあ、このやりとりをさせようと思っただけなので、他に決める必要が無かっただけなんです。皆様の好きなように当てはめると宜しいかと思えます(責任放棄)。

とても短い作品ですが、読んでいただいてありがとうございました。雪月でした。

【きはやく】

あとがき辞退

【ひょうくやく】

まず、投稿する環境が整わないなか、代筆してくださったピーすけさんに感謝を。

日曜日の出来事がテーマのこの合同本で、執筆にあたってまず考えたのは、他の人が書かないであろうものを書こう。ということでした。そんな思惑で裏をかいたやり方を模索し、結果としてSNSネタに辿りついたのですが、まとめるのに四苦八苦で、ちよつとわかりづらくなってしまうかな、とも思っています。

訳がわからない。という感想を持たれた方には、すみません。力不足です……。ただ、書いていてとても楽しい話でした。

提唱者の明日の明後日さんには、完成後にお礼の言葉を送りたいと思います。

また機会があれば、参加したいですね！。

【霞煌さん】

どうもこんにちは、霞煌です。この名前を使うのはいつ振りでしょうか。後書きを書いた経験がほとんどないので思ったことをただ書いていこうと思います。私は前から艦これにハマって艦これSSを書いたりしてました。皆さんはSSを知っていますか？一般的には地の文のない会話文だけの台本形式のショートストーリーの事を言います。その読みやすさだったり軽い感じが大好きで艦これも好きだったので艦これのSSでも書こうと思って今回参加しました、これを機に皆さんもSSに興味を持ってくれたらなと思います。ところで皆さん、艦これと言えば劇場版の公開日が決まりましたね。え？知らないって？11月26日ですよ！覚えてくださいね！きつと

劇場版では素晴らしいキャラデザと音楽が待っていることでしょう。え？ストーリー？知らない子ですね……。でもきつと面白いと思うのでよかったら観見に行ってみてください、それではまた。

【充電池さん】

あとがき辞退

編集後記

明日の明後日です。編集後記って何書けばいいんだってばよ。

今回合同本を主催するにあたって、「合同本を出してまでやりたいテーマがない」「そもそもお話書けるか分からない」といった心理的な障害が大きく、話を持ち掛けられた当初はあまり乗り気ではなかったのですが、「(自分が書きやすそうなテーマにしちやえば)いじゃん」「(書き掛けの話にこじつけちやえば)いじゃん」といった励まし(?)を受けたりもして、主催するに至りました。蓋を開けてみれば、結局自分の作品は間に合わず、掲載させることはできなかったのですが(汗)

しかし、最終的に本書に寄せられた作品は込み込みで12点と、多くの数が集まりました。また、単に数の多さだけでなくひとつひとつの中身の質の高さと言ったらもう、「日曜日の出来事」なんていうふわっとした、半ば無茶振りなテーマに対し、寄稿者の皆さまが各々想像の翼を広げてくださったお陰です。この場を借りてお礼申し上げます。

また、締め切り後しばらく企画を放置する形となってしまう、双剣士さんには多大なご心労をお掛けしてしまったかと思えます。仕事の都合で自宅のPCに触れられない環境となっていました、ご心配お掛けして申し訳ありませんでした。

とにもかくにも、期日通りに発刊することができ、ハイクオリティな作品が集まった合同本になったかと思えます。主催者としての面目躍如と言ったところででしょうか。もちろん、募集フォームの準備や細かいルールの取り決めなど、全面的なサポートをしてくださった管理人の双剣士さん、質の高いイラストや小説をお寄せ頂いた寄稿者の皆様を始めとした、止まり木利用者の皆様のご協力があったること。むしろ私テーマ決め以外何もしてないですね（苦笑）。次の有志合同本では作品を投稿できるよう、マメにSSフォルダを開いてちよつとずつでもお話を書いていけたらと思います（書いていくとは言っていない）。

最後に、本書発刊に当たってご協力くださったすべての方に、もう一度感謝の言葉を述べて、終わりたいと思います。ありがとうございました。

それでは以上を持ちまして、編集後記とさせていただきます。

明日の明後日でした。

奥付

2016年 夏の有志合同本「日曜日の出来事」
2016年8月29日 発刊

表紙イラスト ピーすけ
編集 明日の明後日
公開 ひなゆめファンの止まり木
<http://soukensi.net/perch/>